



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	札幌市北区新琴似における「YOSAKOIソーラン祭り」を通じた住民交流とその課題に関する研究
Author(s)	頃安, 悠希
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	学士(文学)
Issue Date	2022-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/84568
Type	bachelor thesis
File Information	2021Koroyasu.pdf



令和3年度卒業論文

札幌市北区新琴似における「YOSAKOI ソーラン祭り」
を通じた住民交流とその課題に関する研究

人文科学科 人間システム科学コース 地域科学研究室

指導教員：宮内泰介

学生番号：01180023

氏名：頃安悠希

目次

1 研究の背景と目的	3
1-1 背景と目的	3
1-2 章立てと構成	3
1-3 「祭り」という言葉の定義について	4
1-4 都市祭礼の特色と課題	5
1-5 よさこい系祭りの展開	6
1-6 現代社会における町内会・住民活動の概要	7
2 研究方法と調査対象	12
2-1 調査対象の選定理由と調査方法	12
2-2 新琴似地域の概要	15
2-3 YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会	16
2-4 新琴似会場実行委員会	16
2-5 新琴似天舞龍神	17
3 新琴似地域の YOSAKOI ソーラン祭りを通じた住民交流の考察	19
3-1 新琴似地域における住民活動の様相	19
3-1-1 新琴似における町内会を通じた住民交流	19
3-1-2 新琴似地域におけるテーマ型活動を通じた住民交流	25
3-1-3 新琴似地域における町内会活動の課題とテーマ型活動の意義	26
3-2 YOSAKOI ソーランを通して新琴似に広がったコミュニティ	28
3-2-1 YOSAKOI ソーランを通じた住民交流の特色	28
3-2-2 新琴似地域における YOSAKOI ソーランの始まり	31
3-2-3 学生のイベントから市民の祭りへ	33
3-2-4 祭り運営上の諸課題	36
3-2-4-1 祭りの縮小	36
3-2-4-2 担い手の主体性の低下と世代交代の困難	37
3-2-4-3 祭りのイノベーションの難しさ	38
3-2-4-4 祭りの資金難	39
3-2-4-5 住民からの声	40
3-2-5 新琴似天舞龍神の活動と地域への浸透	42

3-2-5-1 新琴似天舞龍神を通して生まれる住民交流	42
3-2-5-2 新琴似天舞龍神の地域への浸透	43
3-3 開始から 30 年を迎える現在において新琴似と YOSAKOI ソーラン祭りが抱える課題	49
3-3-1 祭りに参加者・担い手を取りこむこと	49
3-3-2 地域住民への還元の必要性	49
3-4 小括	51
4 結論	53

1 研究の背景と目的

1-1 背景と目的

本研究の目的は、札幌市新琴似地域を事例に、地域の住民活動の意義を検討したうえで、YOSAKOI ソーラン祭りを通じた住民活動の特性・課題について明らかにし、地域社会にとって望ましい祭りの在り方を検討することである。

1950年代に地域振興を目的として高知で始められた「よさこい祭り」は、商店街を起点とした市民参加の裾野を広げ、現在では毎年恒例の県民文化として浸透している。1990年代になると「よさこい」の文化は、北海道に持ち込まれ、北海道の民謡「ソーラン節」と融合した「YOSAKOI ソーラン祭り」として新たな祭りの潮流を生み出す。YOSAKOI ソーラン祭りは1990年代～2000年代にかけ、若者を中心に急速に参加者を増やしたが、2010年代初頭をピークに参加者人口が減少し、祭りの開始から30年となる現在、祭りの今後の在り方が問われるようになっている。

本研究ではまず、「祭り」という言葉について考え、これまで行われてきた都市祭礼に関する研究を整理したうえで、全国に展開する「よさこい系」祭りおよび、YOSAKOI ソーラン祭りに関する先行研究を基に、その特色を整理する。そして、これまで特定の地域社会にフォーカスして、祭りが地域住民からどのように受け止められているか、またどのような波及効果があるのか議論した研究がなかったことから本研究では、札幌市新琴似を事例に、祭りにおける市民参加の様子、町内会や地縁との関係性、市民にとっての祭りの意義について議論する。

すなわち、本研究では祭りやイベントの存在意義や維持要因について研究した先行研究を踏まえ、札幌市新琴似地域における祭りの在り方について検討する。YOSAKOI ソーラン祭りの存在意義である「交流の創出」に焦点を合わせ、新琴似地域における住民交流の現状を地縁型活動とテーマ型活動に分けて整理し、YOSAKOI ソーラン祭りが新琴似における住民交流にどのような影響をもたらしているのか、明らかにする。そのうえで、祭りを通じた住民交流の課題を明らかにしたい。

1-2 章立てと構成

1章では、農村社会のなかで営まれてきた伝統的な祭礼とは異なる特徴を持ち、都市文化の浸透とともに出現した合衆型祝祭について、その特徴や問題点を先行研究を基に明らかにする。さらに、現代社会における住民主体の地域づくり、公共サービスの維持の重要性について確認し、それらの活動の基盤となる地縁型コミュニティと、テーマ型コミュニティについて現状を整理する。地縁に基づく住民自治の主体となってきた町内会・市民活動などの

地縁型コミュニティや、ボランティア・NPO・趣味やスポーツなどの共通の目的のもとにあつまるテーマ型コミュニティについて、その現状と課題を整理する。

2章では、調査対象の選定理由と調査方法を示すとともに、調査を行った新琴似地域および、YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会、新琴似会場実行委員会、新琴似天舞龍神の概要をまとめる。

3章ではまず、新琴似地域の特性を踏まえたうえで、YOSAKOI ソーラン祭りの現状と課題を議論するために、新琴似地域の成り立ちや住民構成、そこで行われる市民活動の動態について明らかにする。さらに、新琴似の住民やYOSAKOI ソーランの担い手である各主体に行った聞き取り調査を基に、そこでおこなわれる活動の特徴と課題を明らかにする。さらに、1章でまとめた合衆型祝祭やイベントに関する議論を踏まえながら、新琴似におけるYOSAKOI ソーランの担い手の地縁によるネットワークと選択縁によるネットワーク両方の存在の重要性を述べる。そして、最後に新琴似地域で望まれる祭りのあり方を検討する。

1-3 「祭り」という言葉の定義について

議論のはじめに、「祭り」という言葉の持つ幅広い意味を整理しておきたい。

『大辞泉』には、①神仏・祖先をまつこと。また、その儀式。②特に、京都賀茂神社の葵祭。③記念・祝賀・商売・宣伝などのために行うもよおしもの。④江戸の日枝山王神社と神田明神の二大祭りのこと。⑤男女の性交。などの意味が挙げられている。YOSAKOI ソーラン祭りは③の定義が最も当てはまり、「イベント」という言葉でも置き換えることができる。これらは社会に根付き、伝統的に催されてきた神社祭などの祭りとは全く異質のものだと考えられる。一方で、矢島（2015）などは①の祭りを「伝統的祭礼」、③の祭りを「合衆型祝祭」と位置づけ対比的に論じている。これらの研究では、①の祭りと③の祭りを社会変動の一つの潮流の中に並べている。

また、『コミュニティ事典』では、伝統的祭礼を農村社会におけるものと都市空間におけるもので分類し、後者を都市祭礼としてその特徴を論じている。都市祭礼の特徴としては、①疫病払いなど、夏祭りが多く、②氏子規模が大きく、祭礼の組織や行事も複雑である、③「見せる」要素が入ることによって、華美になる、④町内対抗の意識が芽生えやすい、⑤神事よりも付け祭りの要素が強化され、町内の行事が中心となる、などの点を挙げている。そして、戦後に開始された高知のよさこい祭りをその延長にあるものと分類している。さらに、1950年代に始まった高円寺・阿波踊りや、1992年に始まったYOSAKOI ソーラン祭りを「地域から離陸していく新たな都市の祭り」の事例として挙げている。さらに松平（2000）も同様に、町内会を基準とした地域住民の踊りから、地域を離れた都市祭礼への変化を指摘している。

1-4 都市祭礼の特色と課題

戦後以降に拡大してきた都市祭礼やイベントに関しては、様々な議論が行われてきている。20世紀後半以降、日本の社会構造や生活スタイルが変化するのに伴い、祭りの在り方も変化した。本節では、これまで行われた先行研究を基に、定義があいまいな都市祭礼についてその特色をつかむとともに、都市祭礼やイベントと地域住民との理想的な関係性について考える。

有末（1983）は比較的伝統的な都市祭礼について扱い、東京都中央区佃・月島の住吉神社大祭を事例に、祭祀組織が年齢組と町組によって支えられる地縁性と、それに対する住民のアイデンティティを捉えた。さらに、そうした祭祀組織の形態が住民の居住歴や居住形態と深くかかわっており、地縁性とその変化を大都市の社会変動の過程の中で見ていくことが必要であるとした。実際に、都市の祭礼は戦後の社会の変化の中で、その姿を変えていく。宇野（1980）や上野（1984）、松平（2000）などは、その変化の過程を記述している。宇野（1980）は、神戸まつりについて取り上げ、都市における行政主導型の祭りの存在を明らかにした。こうした「都市祭」は「従来からの地縁・血縁を基盤にして、社寺などで伝統的に行われている祭ではなく、近代以降の政治・経済もしくは行政などに立脚した集団を母体にして、主催団体の名による文書によって、成立・日程・行事・動員などが決定され、文書もしくは口頭で明確に祭の目的が明示され、往々にして祭開催回次が明示される祭」と説明した。一方、上野（1984）は、共同体での地縁が衰退する一方で、「選択縁」で人と人とが結ばれる祭りが増加していることを指摘した。また松平（2000）は、現代の都市型の祝祭を形成する集団原理として、「合衆」という集団性を主張した。これは伝統的祭礼の基盤となっている氏子組織・町内会を中心とした集団原理と対比して語られ、日常的な生活諸縁から脱出した個人の集まりである「衆」、あるいは自由で一時的な仲間としての「党」が、互いに祝祭の主體的な担い手となって、祝祭が営まれるとしている。

また、菅野（2011）や金井（1990）は、現代の都市祭礼の望ましいあり方について論じている。菅野（2011）は、このような祭りに社会的紐帯を再構築・強化する機能があるとし、今後の祭りの問題として、祭りを支える共同体が衰弱していることを指摘した。また、住民・行政・企業・選択縁による協力者が共に共創・共同していくことで、地域の持続的発展を図ることの重要性を指摘している。一方、金井（1990）は地域振興とイベントについて、イベントが地域振興のためのきっかけ、動機づけにすぎないことに留意する必要があると述べ、イベントによる地域振興の三要素として、「①人づくり：隠れた人材の発見や、住民の自主性が求められることによる組織の活性化。地域住民との間に新しい組織や文化が生まれること」、「②産業振興の拠点づくり：サミットやシンポジウム、物産展示会などによる地場産業の活性化、新しい産業の誕生、他業種の連携」、「③地域整備計画への連動：イベントに客が集まり需要をうむことで、行政による施設・インフラの整備が促されること。」を挙げている。

1-5 よさこい系祭りの展開

全国には、よさこい祭りをはじめとする「よさこい系」祭りが数多く存在する。そしてその多くはよさこい鳴子踊りが YOSAKOI ソーラン祭りに持ち込まれ、引き起こされた「よさこいブーム」に由来するところが大きい。こうした「よさこい系」祭りの展開の動向について、以下で先行研究を整理しながらまとめてみたい。

川竹（2020）は、よさこいの全国への展開について、その過程をまとめている。川竹によると、よさこいの発祥は 1954 年に高知で行われた「第一回よさこい祭り」にさかのぼる。高知商工会議所の有志の提言がきっかけで、徳島県で盛大に開催されている阿波踊りを参考に、高知に活気をもたらす祭りの設立が目指された。宗教色がほとんどなく、市民の健康と繁栄・商店街などの経済の活性化を目的とし、大街という地区単位、小学校の校区単位を基盤に競演場や演舞場を整備しており、市民ぐるみのつながりを持って祭りを運営することが目指されていた。さらに、1992 年には北海道大学の学生だった長谷川岳氏がよさこい祭りの活況を見て、札幌で「よさこいソーラン祭り（第 2 回以降は YOSAKOI ソーラン祭り）」を企画した。これ以降、「よさこい系」祭りが全国に波及する。学生の創設メンバーは YOSAKOI ソーランの普及活動を各地で行い、1990 年代～2000 年代前半にかけて道内チームの数は大きな広がりを見せた（図 1）。1990 年代後半になると、全国各地でよさこい系イベントが生まれた。導入の背景には、多様なつながりで人間関係を補うことが期待されたことや、道路を使ってできることが市街地活性化に適していたということが挙げられている。

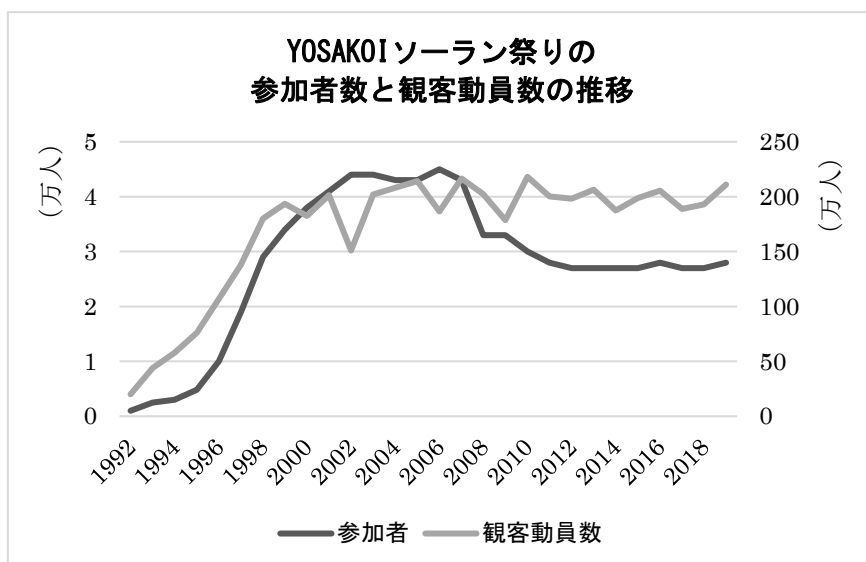


図1 YOSAKOI ソーラン祭りの参加者と観客動員数の推移
「YOSAKOI ソーラン祭り公式ホームページ」を基に筆者作成

伊藤 丑人氏は、「よさこい系」祭りを最初に学術的に研究し、地域活性化のための手法としてよさこい祭りを評価した。伊藤 (2006) は、これまでの都市祭礼研究が、神社を中心に町内が単位となっていて行われる、農村祭礼の研究手法を踏襲していることを問題視し、現代の都市社会の特性を踏まえて「よさこい祭り」について論じた。都市祭礼研究では、多元的な住民が共存している状況、そして非集团的で多層的な組織様態や住民の流動的な状況を考慮すべきだとし、よさこい祭りにおける、脱中心的な構造や民主的な運営、参加の多様性を指摘した。また、YOSAKOI ソーラン祭りにおいては、学生たちが「まずは自分たちが楽しみたい、それを高知のように街でやってみたいという動機があって、その過程で市民との連携を通して本格的な祭りの展望が具体化してきた」(伊藤,2005 : 284) としつつ、年次ごとに計画的に発展し、当初から一種の運動という性格を具えていたとした。また、北海道においては元来、県人会を超えた地域住民同士の互いの絆が弱かったとし、「市民」という概念が日常的に共同生活を送っているという意味での地域を超えて想定されているとした。YOSAKOI ソーランでは踊り好きな人のネットワークが形成されたが、ここでは新しい範囲の地域という概念が表出しているとした(図2)。また、YOSAKOI ソーラン祭りの特徴として、祭りの財政が自主財源化し、企業や行政からの支援に依存しない運営が行われているとした。

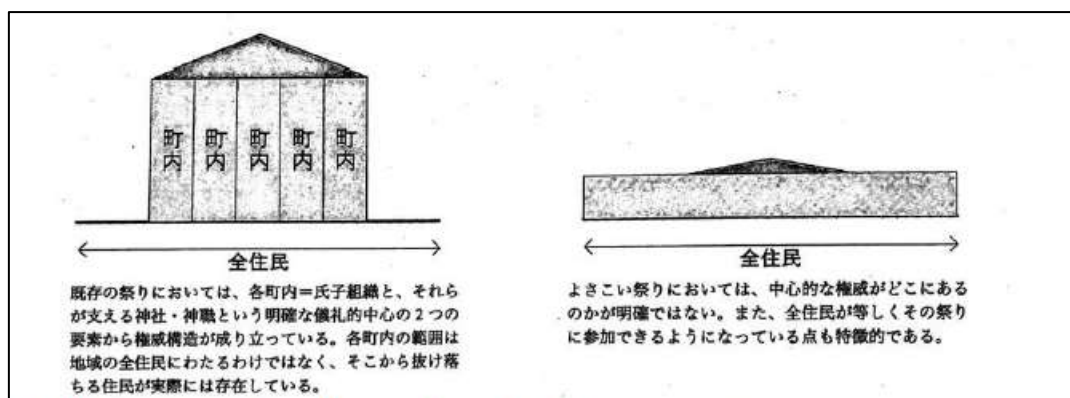


図2 既存の祭りおよびよさこい祭りにおける権威構造の比較 伊藤(2005)

1-6 現代社会における町内会・住民活動の概要

本研究では札幌市新琴似を事例として、YOSAKOI ソーラン祭りを通じた市民参加の様子、町内会や農村社会との連続性、市民にとっての祭りの意義について明らかにしていく。1章4節や、1章5節では、農村社会において祭りは地縁によるネットワークの中で営まれていたものだったが、共同体での地縁が衰退する一方で「選択縁」によって人が結ばれる祭りが出現し、YOSAKOI ソーラン祭りもそのような時代背景の中で誕生したものであることを明

らかにした。YOSKAOI ソーラン祭りの現状を捉えるためには、かつての農村社会から共同体のあり方や地縁・血縁によるネットワークのあり方が変化した現代社会において、地域社会と住民の間にどのような課題があるのか捉えることが必要である。この視点から、本節では現代社会における町内会や住民活動の概要をみていきたい。

現代社会においては、住民主体の地域づくり、公共サービスの維持の重要性が増している。総務省（2020）は地域社会の現状として、超高齢・人口減少社会の到来により、多様化・複雑化する住民ニーズや頻発する自然災害への対応など、自治体に多くの課題への対応が期待されるとした。

広井（2017）は、「地域密着人口」の増加、「社会的孤立」と都市型コミュニティの確立、「居場所」の重要性、「コミュニティ空間」としての都市・地域づくりなどの広い観点から、都市自治体政策の在り方を論じている。また、地域との関わりが強い子どもや高齢者世代を「地域密着人口」と定義してその割合が今後増加していくとし、地域を中心とした社会づくりの必要性を指摘している。さらに、大都市における政策課題として、『「コミュニティのつながりの希薄化や孤独』といった、いわばソフト面の問題』が多くあげられる傾向があることを明らかにしている。また、岩月（2009）は、1995年の阪神淡路大震災を契機に、「住民主導による地域経営」が強く意識されるようになったとし、被災住民間での「連帯」と「コミュニティ意識」に着目している。一方で、平時においてコミュニティ意識が住民の意識に上らない地域が多数であることを問題視している。実際に総務省（2020）は、現代の町内会の加入率は平均71.8%であるが、90%以上の都市自治体が約1割ある一方で、50%未満の自治体も約1割あり、大都市圏を中心に低い傾向があるとしている。住民自身による地域の課題解決を行っていくためにも、住民主体の地域への関心の向上と、自治組織の加入率を上げていくことが重要である。

これまで地域型の活動は、町内会・自治会が住民自治の主体として担ってきた。澤田（2017）は、町内会活動を代表する地縁組織の活動の歴史的背景とその現代における意義について論じている。それによると、地縁組織の誕生は1884年以降、内務省の告示によりそれまで戸長制度における広範な地域に関わる事務の財源だった「協議費」が、「区長村費」（行政事務の費用）と狭い意味での「協議費」（お祭りのような地域の費用）に分けられたことに端を欲する。その結果、役場とは別に協議費によって運営する組織として、「町会」などの地域自治組織が生まれた。さらに1889年の市制・町村制に伴い、地方公共団体にかわって集落において管理されてきた共有財産や、地域の公共サービスを維持するために、地縁組織としての「区」が設立された。また、1940年には内務省から「部落会町内会整備要領」が出され、従来の区などの自治組織は町内会・部落会などに一元化され、1942年には大政翼賛会の指導下に入ったのち、最終的に1943年市制・町村制の改正によって法的に自治体の首長の指導下に置かれることになった。終戦後は1947年に連合国軍総司令部（GHQ）により町内会・部落会は解散するが、事実上名称を変えながら維持されていた。1952年のサンフランシスコ講和条約の発効に伴いポツダム政令が廃止されると、再び自治会などが全国に組

織された。

町内会・自治会の現代における活動は、平成19年の『国民生活白書』が特に述べているところによると、「区域の環境美化、清掃活動、リサイクル活動」「住民相互の連絡」「盆踊り、お祭り、敬老会、成人式などのイベント開催」「市・区の広報誌などの回付等行政からの連絡」「防災活動・地域の安全確保」「集会施設、生活道路、街路灯等の計画づくり、維持管理」「スポーツ・レクリエーション活動」「行政機関・議会に対する要望・陳情など」「芸術・文化活動」「地域福祉・介護・保険・医療活動」「自動・生徒に対する学校教育支援」「地域のまちづくりへの参加、地域づくりなどの政策提言」「地区計画・コミュニティ計画の策定への参加」などとなっている。また、『国民生活選好度調査』（2007年）では住民の参加頻度について、年数回程度以下が大半であるという調査結果が出されている。町内会・自治会では公衆衛生、住民交流、行政からの連絡、防災などの活動を行うことで、快適で安全な生活を整えていることが分かる。町内会・自治会の活動はソフト・ハードの両面で地域住民の生活を支えている。

つぎに、現代における住民交流の様子をまとめる。付き合いに関する意識などについて、『平成17年度 国土交通白書』は以下のような調査結果を示している（図3）。

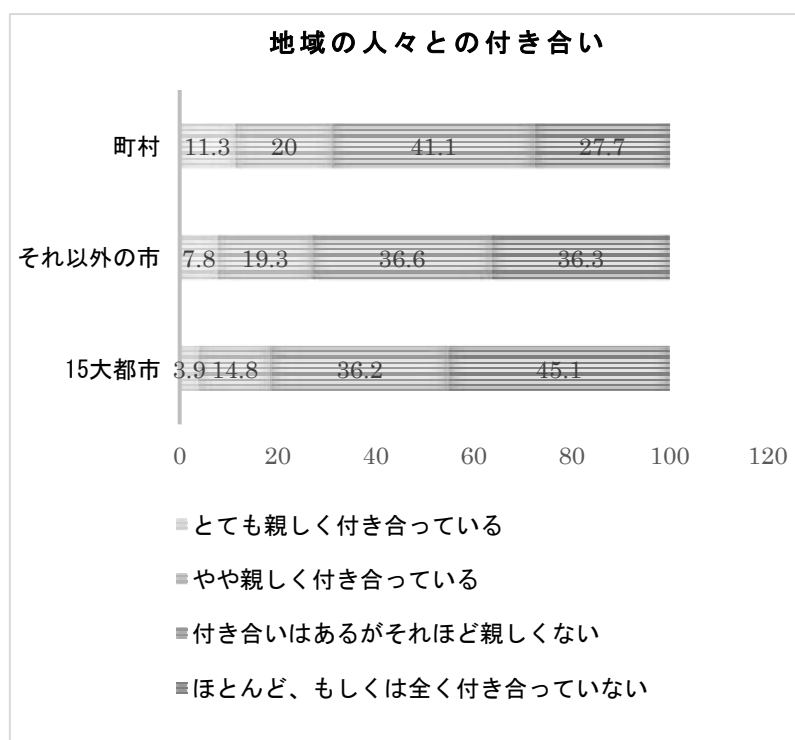


図3 地域の人々との付き合いの現状

出所：『平成17年度 国土交通白書』（国土交通省）

（注）全国の一般世帯を対象に、インターネット調査を実施（標本数2000、平成17年12月調査）

この調査によると、地域の人々とのつきあいについて、自治体の規模が大きくなるにつれ「とても親しく付き合っている」「やや親しく付き合っている」の割合が下がり、「ほとんど、もしくは全く付き合っていない」の割合が高くなっていることが分かる。また、地域の人々との付き合いが疎遠な理由について、「昼間に地域にいないことによる関わりの希薄化」や「コミュニティ活動のきっかけとなる子供の減少」「住民の頻繁な入れ替わりによる地域への愛着・帰属意識の低下」「情報化の進展などによる地域でのコミュニケーションの減少」「学生や単身赴任者など地縁的關係を志向しない住民の増加」「近隣商店街の衰退などによるコミュニケーションの場の減少」などが大都市では多くあげられている。

また平成19年度の『国民生活白書』（内閣府）では「地域活動への不参加率が高くなる要素」として①有業者（サラリーマン、自営業者）であること。②集合住宅に住んでいること。③借家・一戸建てに住んでいること。④給与住宅などその他の住宅に住んでいること。を挙げ、「地域活動への不参加確率が低くなる要素」として①年齢が高いこと。②子供がいること。③既婚・有配偶者であること。④居住年数5年以上であること。⑤農山漁村地域に住んでいること。⑥社会のために役立ちたいと思っていること。を挙げている。

続いて、地縁型コミュニティとされる町内会・自治会とは異なり、住民が共通の目的のもとに集まって行われる活動について触れておきたい。こうした結合によるコミュニティは一般に、「テーマ型コミュニティ」「テーマ・コミュニティ」などと呼ばれ、住民交流の新たな拠点となっている。ここで改めて、住民同士の交流の意義について考えておきたい。

関西各地で「まちづくり井戸端会議」という取り組みを行う久（2017）は、「北千里地域交流会」でのインタビューを通し、アソシエーションな交流の場の意義について明らかにしている。「①交流の場は、気づきの場、連携の場、として機能している。②合意形成や意思決定を行い組織ぐるみで活動を展開してきた従来の活動形態と異なり、交流の場を契機とした活動は気づきによる自発的なものとなり、参加者の気づきを促し、主体性を高める場となっている。③合意形成や意思決定を行わない性格ゆえに、立場や価値観、意見の異なる多様な参加者が参加し、気づきを高めることができる。④気づきを楽しむ参加者は、自らが発言することがなくても、人の話を聞いているだけで満足感、充実感を感じている。⑤連携の場としての交流の場は、従来個々に活動を展開してきたメンバーをつなげる役割を果たしたり、補完しあうことで活動を実現させること、地域のネットワークを持てなかった人々のつながりづくりを促進させることに役立っている。⑥交流の場を活性化させる条件としては、参加者の主体性の高さや強制されない自由な雰囲気が大切である。」の6点を挙げている。住民が主体的に参加して活動するテーマ型コミュニティでの交流は、そこに参加した住民同士が、相互に「気づき」を与えることで、主体性を高める・住民同士をつなげるといった機能があることが分かる。

また、加山・李代（2009）は地縁型組織とテーマ型組織それぞれの特徴と、その連携の必要性について論じている。テーマ型組織はアソシエーション性のゆえに、地域との関係が弱いことや、非充足性、特異性、拘束性、アマチュア主義という欠点を指摘した。一方、地

縁型組織は、行政と強いパイプをもちつつ、地域を網羅する機能（世帯単位制、地域占拠制、全世帯加入制、包括的機能、行政の末端機構）を歴史的に保ち続けてきたものの、若年層が参加しない、あるいは参加できない状況に陥っている場合が多くみられ、「空洞化」「形骸化」という危機に瀕しているとした。また住民の参加動機として、前者は自らの関心や利害である一方で、後者は自らの住む地域を自分で守ろうとする意志にあるとした。

超高齢・人口減少社会の到来を前にする現代、住民が主体的に地域づくりに参加し、住民同士の交流をベースとして、力を合わせて地域の課題を乗り越えていくことが求められている。町内会の成立背景をたどると、地縁型組織が行政上重要な役割を負ってきたことが分かり、現代においても、その活動は公衆衛生や広報、住民の交流の促進など広範にわたっている。しかし、情報化などを背景に地域とのコミュニケーションが減少し、昼間に地域にいない人が多くなった現代において、町内会活動に対する人々の意識は薄れ、大半の人が年数回程度の参加にとどまることが分かった。一方で近年、住民が共通の目的のもとに集まってできたテーマ型コミュニティが、自由で主体的な住民活動の機会を生み出し、住民同士の交流を通して気づきや満足感を生み出している。地縁型コミュニティはその特徴として、人々の生活に直接結びつくがゆえに、意思決定や合意形成のわずらわしい点、住民の参加動機としても自分の関心や利害よりも自治活動に対する責任感といった部分が大きい点、その地域の住民であることが参加の条件であるゆえに、閉鎖的な性格を持つ点などがあると考えられる。その性格上、主体的・積極的な参加を促すことや、新たな担い手を取り込むことが難しい。

こうした課題を克服し、健全な地域社会を持続させていくためには、第一に、参加しやすく主体的に参加できるような場所を地域に生み出し、住民の積極的な参加を促すことが求められる。テーマ型コミュニティなどを通じたアソシエーショナルな活動をきっかけにして新しい住民の参加を促進し、町内会・自治会などの担い手に取り組んでいくことができないだろうか。第二に、町内会や自治会が担ってきた活動を、町内会を通してだけでなく、テーマ型コミュニティによる活動などを通して参加できるようにすることが必要である。例えば、住民交流を目的としたイベントはこれまで町内会が中心となって担ってきた。町内会はその性質上、地域外の住民を取り込むことが難しいが、幅広いテーマ型コミュニティの活動をきっかけとして新たな参加者を呼び、地域に活力をもたらすことができるのではないかと。

このように地域社会では、地域の活動に触れる機会を生み出すことや、主体的に地域づくりに参加したいと思う人々の受け皿を生み出すことが求められている。こうした中でYOSAKOIソーラン祭りは「よさこい」を踊るという共通の目的のもと、幅広いコミュニティから多くの人々が集まるものである。一方で、祭りは地域社会や地縁組織と密接な関係があり、それらを基盤として祭りが営まれている。次章以降では、「祭りは住民交流を生み出し、地域づくりのきっかけとなりうるのではないかと」という視点に基づき、YOSAKOIソーラン祭りを紐解いていきたい。

2 研究方法と調査対象

2-1 調査対象の選定理由と調査方法

YOSAKOI ソーラン祭りは極めて不特定で幅広い主体によって構成されている。運営の中心となるのはYOSAKOI ソーラン祭り組織委員会・YOSAKOI ソーラン祭り学生実行委員会であり、専任職員と学生実行委員が年間を通して祭りの企画・運営・普及振興活動を行っている。そこに当日は市民ボランティアなどが加わり、当日の運営を担う（図4）。

このような都市祭礼については従来、幅広いネットワークや地縁にもとづかない脱中心的な広がりが増強されてきた。一方で本研究では、YOSAKOI ソーラン祭りの維持、継承のためには、ローカルな視点から祭りの現状を読み解き、課題を明らかにすることが必要であると考え、YOSAKOI ソーラン祭りが行われる地域における、祭りの意義と課題を明らかにすることにした。そこで、地域に地方会場と地域チームが存在し、YOSAKOI ソーラン祭りの担い手がある程度集まっていると考えられる新琴似地域を事例に、YOSAKOI ソーランを通じた住民交流がどのように行われ、どのように維持・運営されているのか、祭りが住民にどのように受け入れられているのかを明らかにする。調査方法としては、祭りの関係者及び地域住民へのインタビューを用いた。

インタビューは、YOSAKOI ソーランの企画・運営をになう YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会事務局および、新琴似で地方会場を運営する YOSAKOI ソーラン祭り新琴似会場実行委員会、新琴似住民を中心とした YOSAKOI ソーランチームである新琴似天舞龍神、新琴似連合町内会、新琴似西連合町内会に対して行った（表1）。

本研究では、YOSAKOI ソーラン祭りを取り巻く住民を「不参加住民」と「参加住民」に区別し、さらに「参加住民」を「観客」「踊り子」「地方会場ボランティア」に分類する。それぞれの語りを通して、それぞれの祭りに対する意識を探るとともに、祭りの意義と課題を明らかにしたい（表2）。

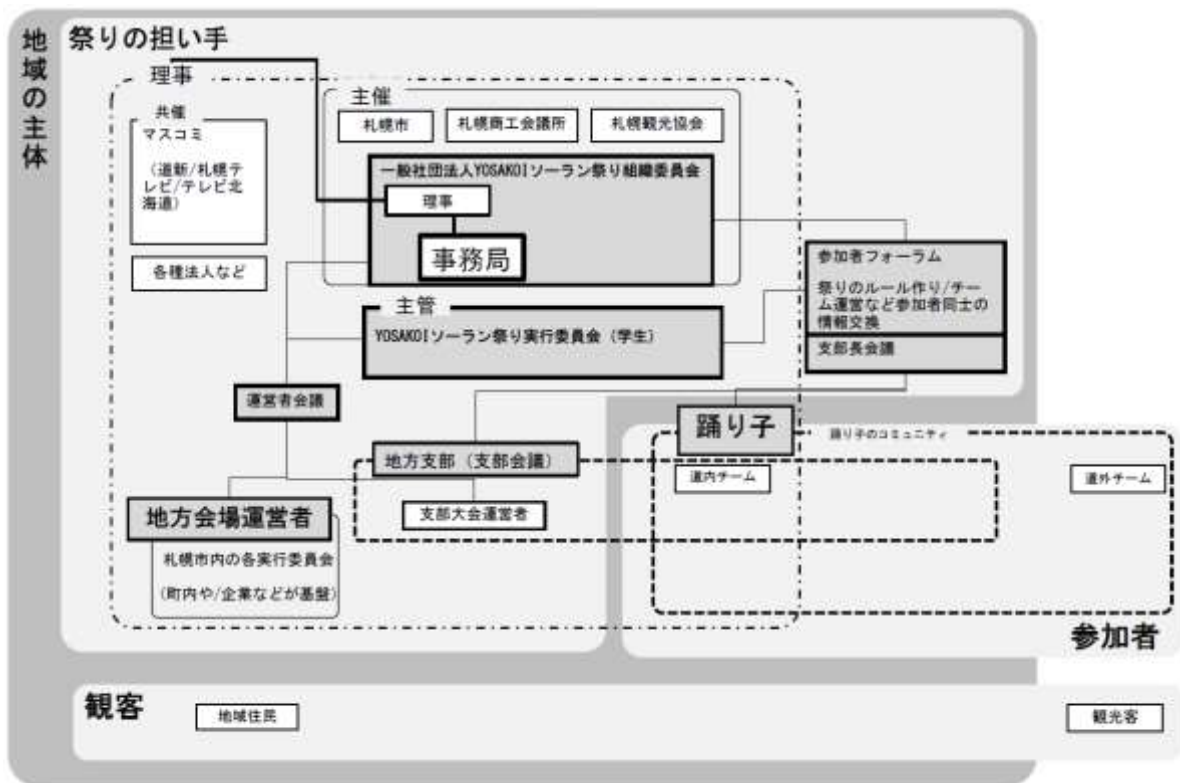


図4 YOSAKOI ソーラン祭りの担い手
筆者作成

表1 調査団体の概要と調査実施日

団体名	所在地	聞き取り対象者（役職名）	調査実施日
YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会	札幌市中央区	伊藤耕作さん（事務局部長）	2021年8月6日
YOSAKOI ソーラン祭り新琴似会場実行委員会	札幌市北区	斉藤純さん（事務局長）	2021年10月4日
新琴似天舞龍神	札幌市北区	梶浦宣明さん（総代）	2021年10月7日
新琴似連合町内会	札幌市北区	下村晃さん（会長）	2021年12月9日
新琴似西連合町内会	札幌市北区	高橋博章さん（会長）	2021年12月9日

表2 YOSAKOI ソーラン祭りを取り巻く住民の分類

参加者の分類	
不参加住民	
	観客
参加住民	踊り子
	地方会場ボランティア

また、新琴似地域の住民の YOSAKOI ソーラン祭りや地域の活動についての意識を探るため、JR 新琴似駅前（2021 年 11 月 3 日（水）16:00～19:00）、プラザ新琴似¹（2021 年 11 月 25 日（木）13:00～17:00）および興正学園²（新琴似天舞龍神の練習）（2021 年 12 月 5 日 14:00～19:00）にてインタビューを実施した。回答数は 16 である。

インタビューは予め質問項目を設定した半構造化インタビューで、「YOSAKOI ソーラン祭りにどのような印象を持っているか」「町内会や地域の活動に参加することがあるか」などの内容を質問し、1 人当たり 4～30 分の回答時間で回答を得た。質問対象者の属性は以下に表で示しているが（表 3）、解答数が少ないうえ、属性の性別や年齢に偏りがある。ゆえに、住民の意識を明らかにするには十分なデータとは言えず、未だ検証の余地が残ることに留意しておきたい。

さらに、新琴似天舞龍神の活動の様子について探るため、活動に参加し参与観察を行った。調査日時は 2021 年 11 月 27 日 19:00～21:30／2021 年 12 月 5 日 14:00～19:00／2021 年 12 月 8 日 20:00～21:30 である。

表 3 調査対象者の属性、実施場所及び回答時間

対象者属性	インタビュー場所	回答時間
10代男性（不参加住民）	新琴似駅前	4分
10代男性（観客）	新琴似駅前	4分
20代女性（踊り子）	興正学園	10分
20代男性（踊り子）	興正学園	5分
40代女性（観客）	プラザ新琴似	6分
50代女性（観客）	プラザ新琴似	13分
50代女性（地方会場ボランティア）	プラザ新琴似	10分
50代女性（観客）	プラザ新琴似	9分
60代女性（地方会場ボランティア）	プラザ新琴似	20分
60代女性（不参加住民）	新琴似駅前	15分
60代男性（観客）	新琴似駅前	8分
60代女性（踊り子）	興正学園	5分
60代女性（踊り子）	興正学園	5分
60代男性（不参加住民）	新琴似駅前	4分
70代女性（観客）	新琴似駅前	11分
80代男性（不参加住民）	プラザ新琴似	30分

¹ 札幌市北区新琴似 7 条 4 丁目にある文化施設。会議室や和室、ホールなどを利用料金を払って利用することができ、多くの住民が各種団体の会議やサークル活動などで利用する。市が設置する「新琴似まちづくりセンター」や連合町内会の事務所も所在する。

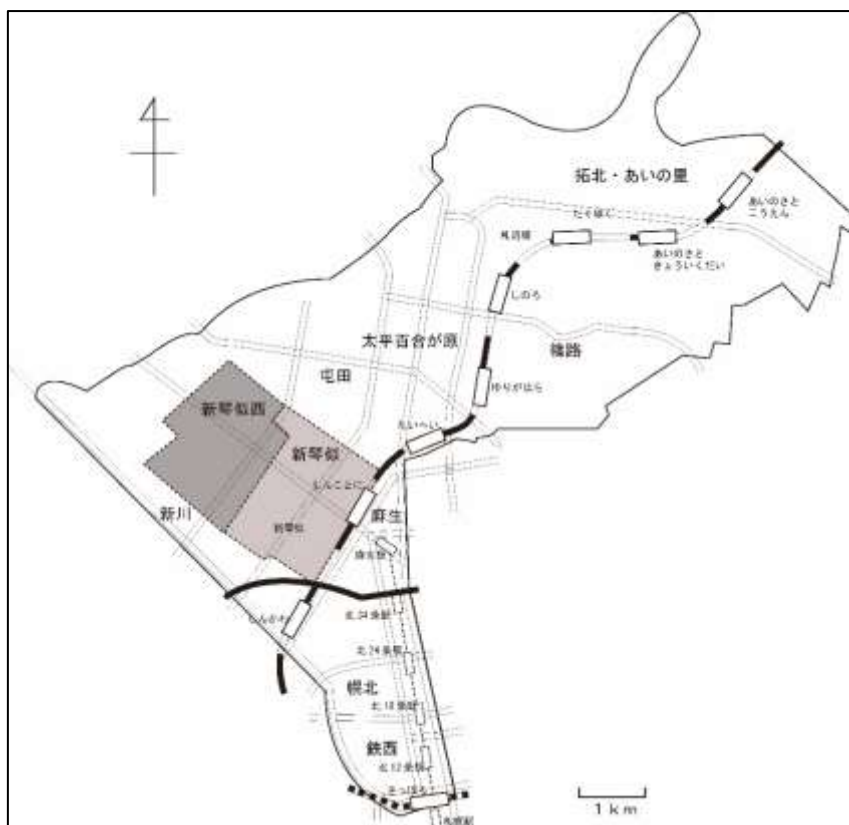
² 社会福祉法人常徳会が運営する児童養護施設。札幌市新琴似 4 条 9 丁目にある。新琴似天舞龍神は施設の体育館を借りて利用することがある。入所する児童の中には、新琴似天舞龍神に所属している児童もいる。

2-2 新琴似地域の概要

新琴似は、札幌市北区、石狩平野の北西部の地域である。57,144人（2017年）が住み、これは札幌市の総人口の約3%である。西は新川、北西部では石狩市、東に屯田に接する地域で、主に住宅街が広がる。JR北海道札沼線（学園都市線）が乗り入れる新琴似駅があり、隣接する麻生の札幌市地下鉄南北線麻生駅も住民の足となっている。

新琴似の歴史は1886年頃の屯田兵の入植に始まる。屯田兵は九州の氏族を中心に、福岡44戸、熊本41戸、佐賀40戸、鹿児島11戸、岡山10戸の146戸が入植した（矢島, 2015）。当時は琴似村の一部であったが、母村の琴似屯田兵村と区別するために「新琴似」と呼ばれるようになった。1955年に琴似町は札幌と合併し新琴似は「札幌市琴似町新琴似」となった。1959年には「札幌市新琴似町」となり、1972年に札幌市の区政施行以降は、「札幌市北区新琴似町」となった。昭和20年代までは農業が盛んであったが、昭和30年代の札幌の急激な人口増加に伴い、新琴似の宅地化が進み、住民が増加した。

新琴似には自治組織として「新琴似連合町内会」および「新琴似西連合町内会」がある。新琴似連合町内会は1965年に組織され、その後世帯数の増加に伴い、1972年に新琴似西連合町内会が結成された。



地図 札幌市北区と新琴似地域
筆者作成

2-3 YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会

YOSAKOI ソーラン祭り全体の運営を担う一般社団法人 YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会は、1名の代表理事会長、6名の理事副会長、27名の理事、2名の監事によって構成されている。顧問を北海道知事・札幌市長・札幌商工会議所会頭が務める。実務を運営する事務局の運営メンバーは4人で、事務局長が1人、事業担当が2人、総務・経理担当が1人、という構成になっている。

祭りを始めた学生団体である「YOSAKOI ソーラン祭り実行委員会」から派生した形で、1996年に専属職員を迎えて設立された「YOSAKOI ソーラン祭り普及振興会」が前身である。1997年から1998年にかけて商工会議所や、北海道、札幌市から理事を招いて設立されたのが、「YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会」である。

祭りが第三回、第四回を迎え実行委員長が、長谷川岳氏から後輩へと交替し始めたころ、学生組織である YOSAKOI ソーラン祭り実行委員会単体での祭り運営に限界が生じ始めた。地域への地道な普及振興が求められるようになったとき、短期集中型だったこれまでの活動では立ちゆかなくなっていた。また、普及振興活動の拡大による収支の赤字や、脆弱な当日の警備体制に対して行政からの道路申請がおりないなど、問題が露呈していた。こうした課題の克服をはじめ、学生ならではのノウハウの欠如や、時間的・経済的な制約といった弱みを補うために、年間を通じて学生実行委員会をサポートし、祭りを普及振興する「YOSAKOI ソーラン祭り普及振興会」が発足し、現在の組織委員会に繋がっている。YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会（北海道経済センター）と YOSAKOI ソーラン祭り（プラザ星園）の事務所は別々に設置されており、役割についても、学生実行委員会は大通会場の企画・運営を、組織委員会は祭り運営のサポートといったように明確に分担がなされている（坪井・長谷川, 2002）。

主な事業内容は、YOSAKOI ソーラン祭りの開催・企画・運営である。祭りの準備に動くのはおもに1月～6月の期間であるが、YOSAKOI ソーランの普及・発展を目的として年間を通して事務局が置かれている。

2-4 新琴似会場実行委員会

YOSAKOI ソーラン祭りは、札幌市内の複数の会場で開催されているが、そのうち YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会および学生実行委員会が運営するのは、大通り・西8丁目ステージ会場のみである。その他の会場は各町内会・企業による自主運営となっている。第4回までは学生による運営がなされていたが、第5回以降学生の負担削減と祭りのさらなる展開を目的として自主運営となった。

YOSAKOI ソーラン祭り新琴似会場実行委員会は、新琴似四番通りにて行われる、「新琴

似会場」を運営する組織であり、新琴似連合町内会および、新琴似西連合町内会の住民約 200 名によって構成される。水曜日～日曜日の 5 日間の祭りの日程のうち、土曜日・日曜日の 2 日間の運営を担う。

組織は、実行委員長、事務局長、総合プロデューサー、進行部、会場部、交通部、給水部、審査部、設営部、受付部、接待部、広報部、救護・巡回部、警備部、事務局、監事の 16 の部局に分かれている（図 5）。実行委員長を新琴似西連合町内会会長の高橋博章氏が、副実行委員長を新琴似連合町内会の下村晃氏がつとめる。各部の部長は 12 月から祭り当日まで毎月実施される役員会に出席し、会議を行っている。当日はそれに各部のメンバーが加わり、土曜日 100 名・日曜日 100 名の計 200 名が祭りの運営に関わる。

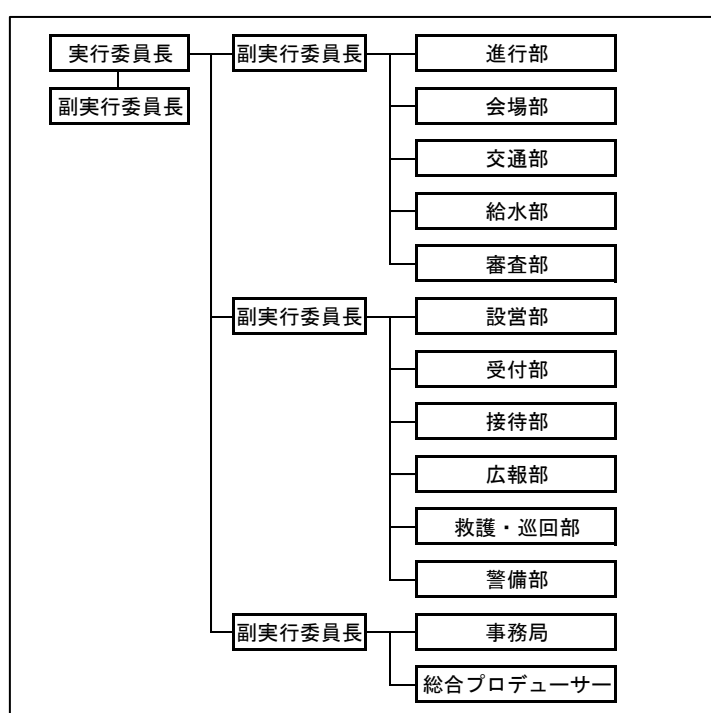


図 5 YOSAKOI ソーラン祭り新琴似会場実行委員会の構成

「YOSAKOI ソーラン祭り新琴似会場実行委員会 全体会資料」を基に筆者作成

2-5 新琴似天舞龍神

新琴似天舞龍神は、札幌市北区新琴似を拠点として活動する YOSAKOI ソーランチームである。チームの発足は 1996 年で、初めて参加した「第 5 回 YOSAKOI ソーラン祭り」では新人王賞を受賞し、2004 年から 2007 年は 4 年連続 YOSAKOI ソーラン大賞を受賞するなどし、YOSAKOI ソーラン祭りを代表するチームとなっている。総代の梶浦宣明氏は

YOSAKOI ソーラン祭りの理事、TWN（タウン）支部³の支部長を務めるなど、祭りづくりにも積極的に参加している。メンバーは約 150 名であり、YOSAKOI ソーラン祭り当日のスタッフ（大道具などのサポート）も含めると総勢二百人近くになるという。メンバーの 7 割が女性であり、50～60 代の年配の世代が多い一方で、小中学生や児童養護施設「興正学園」の児童、創成高等学校⁴「よさこい部」の所属する高校生が所属するなど幅広い世代が参加していることが特徴である。

チームのコンセプトとして「地域の活性化」「青少年の健全育成」「感動の共有」「究極の和」の 4 つを掲げて活動しており、毎年 6 月の本祭への参加および、年間を通して全国各地のイベントでの演舞披露などを行っている。メンバーの多くは新琴似住民であるが、地域外からもメンバーを受け入れており、関東や東北地方から参加するメンバーもいる。

³ 支部制度は道内各地域からの参加者を応援して増やしていくことや、各チームへの情報伝達の簡易化と一元化を目的として作られた制度で、道内各地域に 15 の支部が存在する。TWN 支部は札幌市北区を中心とした支部である。

⁴ 札幌市北区にある、学校法人創成学園が運営する高等学校。2012 年頃からダンスの授業が取り入れられたことをきっかけに、生徒が新琴似天舞龍神にきて YOSAKOI ソーランを踊るようになった。当初同好会の形で参加メンバーを募集していたが、2020 年から「よさこい部」として認可された。新琴似天舞龍神は練習で創成高等学校の体育館を使用することもある。調査を実施した日程では、演舞の構成上練習に参加しておらず、インタビューなどを実施することができなかった。

3 新琴似地域の YOSAKOI ソーラン祭りを通じた住民交流の考察

3-1 新琴似地域における住民活動の様相

3-1-1 新琴似における町内会を通じた住民交流

3章では、新琴似地域において、YOSAKOI ソーラン祭りがどのように取り入れられ、地域住民にどのような影響をもたらしているのか、YOSAKOI ソーラン祭りの担い手や地域住民へのインタビューの結果を基に考察する。

本節では、新琴似における住民交流の様子について見ていく。1章6節では、YOSAKOI ソーラン祭りの現状を捉えるために、現代社会における地域社会と住民の間にある課題を捉えることが必要であるとしたが、本節でも同様に、新琴似地域における YOSAKOI ソーラン祭りの課題を明らかにするために、新琴似で行われる活動の内容、地域住民の意識、またその課題について明らかにしていきたい。

まず、新琴似地域における町内会活動の概況を整理する。新琴似には自治組織として新琴似連合町内会と新琴似西連合町内会があり、新琴似連合町内会には36の、新琴似西連合町内会には17の単位町内会が所属する。基本的な活動単位は各単位町内会であるが、各町内会の部会が合同で連合町内会として行事を行う場合もある。また、連合町内会としては1.5か月に1度ほどのペースで会議を行う。また、各単位町内会の内部には班があり、数軒単位で市の広報誌やお知らせの印刷物の配布、市の街区・公園の清掃、地域の街路灯の管理などの活動が展開されている。町内会では、こうした住民の生活を支える活動の他にも、住民交流を目的とした活動が行われている。新琴似連合町内会では、「YOSAKOI ソーラン祭り（新琴似会場）」をはじめ、「新琴似中央夏祭り」、「連町女性部夏祭り」が毎年開催されており（新琴似連合町内会ホームページ）、新琴似西連合町内会では、「新琴似歌舞伎」「新琴似西まつり」「かむかむ夢サロン」「女性部ウォーキング」などの活動が開催されている（新琴似西連合町内会ホームページ）。

これらの町内活動に対する住民の声は、『新琴似連合町内会三十年史』でも取り上げられており、「市関係の業務に対しては委託料や謝礼金が出て、町内会財政の収入の相当部分を占めているが、こうしたことから町内会を『行政の下請け』と皮肉る者もいる」（新琴似連合町内会,1996）という。また、町内会活動への参加を呼びかけても、「何かメリットがあるのか」「街灯や除雪問題は所詮市がやる仕事、町内会に入ってまで負担する義務はない」（新琴似連合町内会,1996）などと否定的な声をあげる人がいるようだ。

本研究で行った新琴似駅前およびプラザ新琴似で行ったインタビュー（2-1 および表3参照）でも、町内会活動に対する住民の意識を見ることができた。このインタビューは、半構造化インタビューで行われたが、その際の質問項目は次のとおりだった。

(質問の内容)

YOSAKOI ソーラン祭りについて

- 祭りには参加したことがありますか。また、それはなぜですか。
- 祭りにはどんな印象を持っていますか。
- 「新琴似天舞龍神」というチームをご存じですか。また、どんな印象をお持ちですか。

地域の活動について

- その他の町内会や地域の活動に参加することはありますか。また、それはなぜですか。
- その活動にはどのような印象を持っていますか。

ご本人に関する情報

- 新琴似にはいつからお住まいですか。何世代前からお住まいですか。(差し支えなければ教えてください。)
- 普段どのようなお仕事をされていますか。休日は何をして過ごされますか。

上記の質問項目によるインタビューの結果、町内会活動に消極的・非協力的な態度を示す住民がいることが分かった。以下では実際の語りの内容を参照しつつ、住民の意識について明らかにしていきたい。

新琴似駅前のマンションに住む男性は、町内会活動には参加しないと語る。約 30 年前から新琴似に住んでいるというが、これまで声がかかったことや、参加しようと思ったことはないという。

「地域の活動には、昔も今も参加することはないです。きっかけも、声がかかることもないので。助けてくれと言われたら関わるかもしれませんが、内容によるんじゃないですかね。」(60 代男性：不参加住民)

大阪から 6 年前に引っ越してきたという男性は、人と話すことは好きだが、町内会活動に参加していない。町内会の活動は高齢者が多く、話題も似たり寄ったりで楽しくないと話す。大阪では友人と飲み歩くことが多かったようだが、そうした付き合いを逃れて引っ越してきたという。

「面倒くさいし年寄りと何喋るの。病気の話ばっかやで。どっかええ病院ないか、とかそればかりや。大阪にいたときも何も入っていなかったな。若者との交流も無理やで、体力的にもついていかん。……活動となるとどっか不満が出るんやで、20 人くらいの会つくるやろ、一生懸命やってもなあ、若い時から見てきたからな。そんなんやらん。」

日頃のコミュニケーションとしてはやっとなるんだがな。何とか会とか町内会でビール飲むような会は行かん。」(60代男性：観客)

一方で、町内会活動に積極的な住民もいる。男子中学生は子供会をきっかけに地域の活動に参加し、中学生になって部活を始めた後も時間がある時には参加しているといい、母親も婦人会の活動に参加しているという。子供やその親は、子供向けの活動に参加することがあり、町内会活動への参加の契機になっているようだ。

「地域の活動には今も参加していて、町内会で、お菓子を配ったり、ラジオ体操に朝参加している。目が覚めていいなあと思っています。部活はあるけど、中学生になっても活動には参加している。お母さんは参加、お父さんは仕事が忙しいから行ってないです。」(男子中学生：不参加住民)

「町内会の活動には、会館でやっている餅つき大会に参加したりしています。おいしくて楽しかったです。」(男子高校生：観客)

『平成17年度国民生活白書』(内閣府)では「地域活動への不参加率が低くなる要素」として「子どもがいること」が挙げられている。年齢やライフステージが町内会活動への参加/不参加の要因となっている。中学生や高校生は、親に連れられて地域のイベントに参加し、大人や友人との交流を楽しんでいた。また、子育てが町内会活動への参加の要因となる場合もあるようだ。

「子供が小学校に入って、役員とかしたら仲良くなるお母さん方で盆踊りが大好きな人がそばにいて。誘われていきましたね。母親同士がきっかけで。町内会の焼き肉が毎年あったんですけど、それは家族だけでもいったら知っているお母さんがいるから一緒にビールとか飲んで、というのありました。」(60代女性：不参加住民)

一方、高齢者のうち若い頃に町内会にそれほど関わっていなかった人は、「若くないこと」を町内会の活動に参加しない理由に挙げている。『平成17年国民生活白書』(内閣府)では「年齢が高いこと」は「地域活動への不参加確率が低くなる要素」として挙げられていたが、活動に参加するきっかけがなく、退職までかかわっていなかった場合や、地域に長く住んでいない場合は、高齢であることは不参加の要因となってしまうのかもしれない。

「新琴似の町内会の活動には参加することは少ないですね。仕事で篠路の方に出ている。そんなに忙しいとかでなくて、休みもあるんだけどね、したくないだけ。もう若くないから。」(70代女性：観客)

「町内会の活動に参加することはないね。年だから面倒で億劫になってきますね。何かの先生なんか来ていて、いいお話を聞きたいなというのはたまに思うけど、場所が遠かったりとか面倒でね、行かないです。地元の人だったらまた考えが違うかもしれないですね。」(60代女性：観客)

また、居住エリアや居住年数も参加要因となっていると考えられる。約10年前に夫婦でマンションに引っ越してきたという女性は、交流のきっかけがなく、周囲の住民とも挨拶程度で、付き合いを深めていないという。「北海道の人は、素っ気ない感じがする」と語り、孤独感を感じていた。また、交流の幅を広げる気力もあまりないという。女性の孤独感の要因として、マンションでの町内会活動に、活発で参加しやすい雰囲気がないことが考えられる。

一方、住民交流施設「プラザ新琴似」において利用者に行ったインタビュー調査では、町内会活動に頻繁に関わっているという女性がいた。女性は新琴似に生まれ育ち、現在も住んでいる。町内会に参加し始めたのは2007年頃からで、若い頃から参加しているわけではなかった。女性部に参加する住民から声をかけられたことをきっかけに、特に女性部の活動に深く関わるようになったという。町内会活動への参加動機として、義務感や使命感が大きい印象だった。一方で、自主的に関わっていたサロンの活動や書写教室の手伝いは、老人や子供とのコミュニケーションが気晴らしになると語る。活動への参加が趣味や生きがいに繋がっているようだ。

「私実はバリバリ町内会をやっていて、……町内会で女性部をやっていてその仕事はやっていました。…町内会は、女性部の方に『お手伝いしてください』と言われたのがきっかけで、私も軽い気持ちで『ちょっとくらいなら』と思って入ったら、とんでもなく忙しかった。それから抜け出せないでいます。地域の方々が頑張っているんですよ、おじさま方が頑張っているんですよ。…町内会でサロンをやっていたんですが、それも町内会活動でずっとやっていました。下の会場でやって、お昼におうどん食べて会話して、一人暮らしの御老人とかは皆さん呼んで。立ち上げた方は連合町内会の方なんですけど、それのお手伝いをしていました。」(50代女性：地方会場ボランティア)

町内会での活動に役員を辞めた後、民生委員として町内会活動に関わっている女性は町内会活動の意義を語る。生活に密着した町内会活動は地域住民全体の問題であるが、そのことに気づいていない住民が多く、活動の内容を伝えていくことが必要だという。

「町内会の活動は自分の生活の一部なので、ごみの収集とかもそうだし、子供たちの活動もそうだし、そういう声かけも自分たちの生活に密接しているので、知らないふりは

できないと思う。今参加していない人には、そういった意味では参加してほしいですね、みんな詳しく知らないんだと思うんですよね。」(50代女性：地方会場ボランティア)

また、年配の女性の中には、町内会の大きな行事には参加しないが、班単位での交流はあると語る人もいた。生活に密接したゴミ拾いや雪かきなどの公衆衛生・環境整備などの活動に参加しており、参加動機として、隣近所との付き合いの必要性を挙げた。またある女性は、昨年まで働いており未婚であるため、町内会の行事に深く関わることは無かったという。一方で町内会の班の中では、住民で協力して行う雪かきや回覧板を通して、他の住民との関わりがあるという。

「町内会のゴミ拾いとかは前いつていたりしましたけど。やっぱり、横のつながりを知らないとまずいかなあとします。……北公園で昔は盆踊りとかやっていたんですけど、今はやっていないですね。」(60代女性：不参加住民)

「すごく身近なことといえば、……雪を運ぶのなんかは日常の一部だからね、地域のものに参加するとしたら花壇整備とか。……入雪槽があって、みんなで雪を運んだりするんですよ。あの時にお隣近所の親密さが大切で、ああいうときに顔を合わせるからご近所の方とも知り合いになるっていうかね。だからイベントではなく生活の中で接点がありますよね。うちの班は15,6人なのかな。それでも誰かが班長を引き受けて、お金を集めたりやってくれるわけだから、いつも感謝ですよ。それで私も15年かけて、あああの方が〇〇さんみたいだね。そうでないと前と両横ぐらいしかわからないのを、15,6軒分かるのは、回覧板が回ってきたり、班長さんが引き受けてくれて確認しに来たりしてくれるからですよ。」(60代女性：観客)

北海道庁でかつて勤務し、行政に関わっていた男性はこうした班の活動が行政にとって必要であると語る。上で述べた女性の語りと同様に、地域住民全員の問題であり、それに気づいていない人がいると語った。

「班長は10年に1ぺん回ってきて1年間。回覧板を回し始める・回収する、そういう仕事なの。その仕事は必要だと思っているから。自分は田舎の役場にいたから、それがないと立ち行かないのが分かっているから。行政組織としてはありがたい存在。……浸透してPRしていかないと届かないでしょ。助け合いは必要だよ。」(80代男性：不参加住民)

新琴似連合町内会会長の下村晃氏は、こうした班活動に参加しない住民や、町内会費を拒む住民が増えていることを憂慮する。班活動は班長を中心に行われ、班長は1年ごとに班内

の世帯で順番に担当するというが、班長をやらないという世帯があるようだ。自分の暮らしが町内会活動に支えているという実感を持っていない住民が増えているのだろうか。

「町内会の会員は今のところ横ばいみたいな感じなんですけど、なかなかアパートの加入率が悪いですね。除雪もみんなの会費でやっているんだから一部負担するっていう風にお願ひしてもなかなか……関係ないっていうひともいる。……アパートの集合住宅や、新しく引っ越してきた人なんかは、町内会ってなんだとか、班長さんも引き受けないという形になっちゃうので。班長は全員交代で回すんですが、『次来年はお宅で』と言ったら『町内会辞めます』なんて言う人も出てきちゃったりして。」⁵

町内会活動の担い手が減っている原因の一つに、世代交代が進んでいないことがある。昔は若かった担い手も高齢化が進み、出られなくなる人も出てきている。90年代～2010年代と約30年間続いてきた町内会の夏祭りは、商店会の解散で資金難になったことをきっかけに、10年前に中止になった。すぐに再開するつもりであったが、音頭を取る人も出てこないまま10年が経過してしまった。

「盆踊りがずっと前にありまして、ビールや焼き鳥を商店街のメンバーがやっていたんですが、そのメンバーが夏祭りをやろうよといって祭りに発展していきました。今考えてみたら各町内会そんなに年寄りじゃあなかったんですよ。全然交代なしにずっと年が上がってくるとみんな『疲れた』とかなって。要するに世代交代ができなかったということですよ。……ここの地域を故郷にしようと、『ふるさと夏祭り』という形で子供たちに楽しんでもらおうということで商店街と5つくらいの町内会が合同で祭りをやって。大変楽しい祭りだったんですけど、残念ながら商店街が解散するとなってお金の出どころがないし、役員がみんな年取ったんで体力的にも無理だという話で、とりあえず中止にしたら、そこからずっとないですね。」⁶

一方で、新琴似住民へのインタビューからは、町内会活動に積極的ではない住民や、参加しない住民がいる一方で、主体的に参加している住民もいることが分かった。参加している住民は、町内会活動が地域住民の生活を支える重要なものだと感じており、参加動機としては使命感や責任感があるようだった。また、数軒～十数軒を単位に構成される「班」での活動が、雪かきや回覧板などで特に生活に密着し、町内会の基本的な活動単位であることが分かった。また、町内会の行事には参加しない住民の中でも、班での活動には参加しており、それを通して隣人と顔を合わせることで、地域で暮らしていくために必要なことだと感じていた。新琴似地域においては、雪かきなどの活動や行政の広報、防災や防犯の観点からも

⁵ 2021年12月9日 新琴似連合町内会会長 下村晃さんインタビューより

⁶ 2021年12月9日 新琴似西連合町内会会長 高橋博章さんインタビューより

隣人と顔を合わせておくことが重要であることが分かる。

一方で、町内会の行事に参加しない住民の語りからは、町内会の活動に魅力を感じていない様子が感じられた。その理由に、他の住民に対して「冷たい」という印象を持っていることや、活動の中で生じる摩擦やトラブルを「面倒くさい」と感じていることがあった。

町内会活動に対する住民の意識の低下は、地域を支える活動を滞らせてしまう。「夏祭り」の休止が続く背景には、時間が経過するにつれて活動の意義や必要性を感じる住民が少なくなってしまうことがある。「活動の内容を発信していくべき」という声は住民の中にもあり、町内会活動に関心が低い住民に、活動の内容を知ってもらい、活動の意義を実感してもらうためにも、地域ぐるみでの活動を継続していくことが必要である。

3-1-2 新琴似地域におけるテーマ型活動を通じた住民交流

1993年に新琴似四番通りで創立したプラザ新琴似は、地域住民の交流の場として機能している。ここでは、子ども会の交流、青少年育成会の集会、老人クラブ、地域の各種団体の会議などが利用し、地域住民の文化作品展や、新琴似歌舞伎をはじめとする芸能の披露の場になっている。

こうした施設は新琴似の各所に存在している。プラザ新琴似の他に、新琴似長生会館、新琴似北会館、新琴似南会館、新琴似西会館、新琴似・新川地区センターなどがある。

新琴似地域ではこうした施設の中で、さまざまな市民サークル・団体が活動している。こうした、ボランティア・アソシエーションやNPOなどのコミュニティはテーマ型コミュニティと呼ばれるが、本稿では、地域の拠点に自主的に人々が集まって行われる活動を「テーマ型活動」とし、地縁型の町内会活動と比較して論じる。

新琴似におけるテーマ型活動としては、新琴似歌舞伎の伝承・普及・信仰を行っている新琴似歌舞伎伝承会、新琴似音楽祭、しんことにテレビなどがある。また、プラザ新琴似において活動している、くもんの書写教室、絵手紙サークル、書写サークルなどの団体、YOSAKOIソーランチームの「新琴似天舞龍神」などがある。

まず、地域住民が取り組んでいるテーマ型活動について全体を捉えることは、非常に困難であることに留意しておきたい。今回はプラザ新琴似において行われているテーマ型活動に注目し住民の意識を探ったが、幅広い世代が様々なフィールドで行う活動のうち、ごく一部の表象をさらったに過ぎないことははじめに留意しておきたい。なお、新琴似天舞龍神における活動の様相については、次節で記述する。

街頭インタビューを実施した2021年11月26日、プラザ新琴似では「くもん書写教室」と「習字教室」の活動が行われていた。くもん書写教室では、子供から高齢者まで幅広い世代が参加している。活動時間は午後～夜にかけてであり、かわるがわる様々な世代の生徒がやってくる。先生が4人ほどいて、全員50～60代の女性であった。そのうちの一人は、書

写教室でのコミュニケーションが楽しいと語る。子供とのコミュニケーションを楽しんでいるという。以前は町内会のサロンで高齢者と会話を楽しんでいたといい、人と話すのが好きとのことだった。

「書写教室が楽しいですよ……子供はかわいいですし、町内会でサロンをやっていたんですが、それも町内会活動でずっとやっていました。下の会場でやって、お昼におうどん食べて会話して、一人暮らしの御老人とかは皆さん呼んで。立ち上げた方は連合町内会の方なんですけど、それのお手伝いをしていました。コロナでやめましたけどね。」
(50代女性：地方会場ボランティア)

一方、書道教室では80代男性の講師と、50～60代の女性3名の生徒という少人数が活動していた。講師は書道の流派の会長で、新琴似に在住だが他の地域でも教室を開いている。生徒の女性は、「立派な先生にこういうところで指導いただけるのはありがたいことです」と話す。

こうした活動に参加する住民は、必ずしも町内会活動に積極的に参加する住民ではなかった。書道教室でインタビューをした三人の女性は、いずれも町内会活動には班活動を除いて参加していなかったが、教室でのコミュニケーションや職場でのコミュニケーションが生きがいや満足感に繋がっていた。後述する新琴似天舞龍神のメンバーへのインタビューでも同様に、町内会活動には参加していない住民も多かった。町内会活動としての交流の機会には参加していないが、友人・知人などの紹介から自分の興味のある活動に参加することで、職場や家庭以外でのコミュニケーションや気晴らしの機会を得ているようだ。

3-1-3 新琴似地域における町内会活動の課題とテーマ型活動の意義

町内会活動は町内の自治や公衆衛生・防災などを担うものであるとともに、住民と近隣社会との紐帯を強化する機能がある。町内会活動は、排雪溝への雪かきやごみ拾いなど生活に結びついたもので、町内会の「班」を通して近所の人と交流が生まれ、生活するうえでの安心感につながっている。また、市の広報物を回覧板で回すなど、行政の役割を補完する機能もある。さらに、地域における祭りや焼き肉などのイベントを行い地域の活性化の主体となってきたのも町内会であり、新琴似会場の運営を担ってきたのも町内会である。これまで、住民交流を生み出してきたのは、町内会の日々の活動や行事に参加し、一緒に活動をする経験だった。こうした場の意義を語る声が『新琴似連合町内会三十年史』（新琴似連合町内会,1996）に記述されている。

「ある葬式場で、永年勤めた会社をやめて十年ほどになるという人がしみじみと語

っていた。『もう会社には知っている人は少なくなったし、なんのつながりもなくなっている。人生最後は、こうして近所となりの方々のお世話にならなければなりません。そう思うと町内会の存在が急に大切に思われてきますね…。』遠い親戚より近くの人一人ということわざが身にしみてくるという。町内会長も葬儀委員長を引き受けることが多くなり、町内会役員が葬儀一切のお手伝いをする例が増えている。いま、町内会は日常生活から人生終えんまでをも温かく包み込む役割も果たしている。』『新琴似連合町内会三十年史』（新琴似連合町内会,1996）

最後に、新琴似における町内会活動の課題について整理したい。第一に、活動への参加者の減少がある。新琴似西連合町内会の町内会の加入率は長く横ばいが続いており、平均で86.6%である（新琴似西連合町内会,2021）。これは全国平均と比較して小さい数字ではないが、一方で実際に活動に参加し、町内会を担う住民が減っている。この背景には、住民の活動への主体性と当事者意識の欠如がある。その原因として、町内会の活動について知らない住民がいることがある。班での活動を通して環境整備に取り組んでいる隣人の顔を知ることや、行事に参加して活動の内容を知ることなどが必要である。第二に、役員の高齢化がある。地域全体の高齢化が進んでいることも考えられるが、若い世代を活動に取り込めていないことも原因の一つである。上と同様に、町内会活動について若い世代に向けて発信し、活動に参加してもらうことが求められるとともに、長く町内会活動に関わっている住民が、若い層が参加しやすい雰囲気をつくることが求められる。

この一方で、テーマ型活動によるネットワークが、人々の生きがいを生み、地域づくりの新たな担い手となっている。町内会活動には積極的に参加しない住民の中にも、こうした活動に参加する住民は多かった。自由で緩やかなつながりが居心地よく、そこで交わされるコミュニケーションが、参加者の生きがいに繋がっているようだった。こうした活動の利点は、町内会活動の活性化に生かせるのではないだろうか。

以上のことを踏まえて、次節では YOSAKOI ソーランを通じて新琴似に広がったコミュニティについて見ていきたい。

3-2 YOSAKOI ソーランを通して新琴似に広がったコミュニティ

3-2-1 YOSAKOI ソーランを通じた住民交流の特色

本節では、祭りの関係者に行ったインタビューおよび、住民に行った街頭インタビューから、YOSAKOI ソーランを通して新琴似に広がったコミュニティについて考えたい。なお、新琴似天舞龍神のメンバーに行ったインタビューの質問項目は以下のとおりである。

(質問の内容)

- 新琴似にはいつからお住まいですか。
- 新琴似天舞龍神に入ったきっかけは何ですか。いつから参加していますか。
- チームでの活動のどんなところが楽しいですか。
- 他のメンバーとはどのような人と話しますか。どんな話をしますか。
- チームの活動以外で、メンバーやメンバー以外の人と交流する場面もあるのですか。
- チームを運営することや会場運営に関わることについて考えたことはありますか。
- 協賛周りやイベントへの参加を行うことで、地域について認識に変化はありましたか。
- チームの活動以外で、町内会活動や、市民サークル、地域のイベントなどに参加することはありますか。

YOSAKOI ソーラン祭りは、地縁型コミュニティの衰退が拡大する 1990 年代の札幌に、学生によって持ち込まれ、YOSAKOI ソーランブームのなかで急速に参加者の裾野を拡大させた。このことを鑑みても、YOSAKOI ソーラン祭りは集団で踊ることに対して関心を持った人を中心に伝播している。戦後まもなく始まり、町内会や商店街を中心として競演場・チームが結成された高知のよさこい祭りに比べるとその傾向が強い。このことから祭りの根幹には、祭り参加者の主体的な「交流」があり、祭りの維持のための重要な要素だと考えられ、YOSAKOI ソーランの意義は、そこで生まれる繋がりや交流であると考えられている。YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会事務局の伊藤耕作氏は、YOSAKOI ソーランを通して生まれる繋がりや交流が、祭りの魅力であると考えている。

「YOSAKOI ソーランは、魅力としての集団性＝エンターテインメントとして見ていて楽しいというのもあるし、参加する人にとって、とくに学生だと大学時代という多感な時におおきなコミュニティで色んな価値観を共有しあえる環境がある。コミュニティ

としての存在価値は非常に大きいと考えています。」⁷

ここから、合衆型祝祭や、「よさこい系」祭りに関する先行研究を踏まえつつ、YOSAKOIソーラン祭りを通じた交流の特色について考えていきたい。

組織委員会主催の祭りは、6月に行われる札幌の「YOSAKOIソーラン祭り（本祭）」にとどまらず、年間を通して各支部を中心に複数の祭りが開催される。事務局は各チームの参加を促進することで、祭りを通じた交流の機会を広げている。祭り会場では「総踊り」を通して踊り子同士、踊り子と一般の参加者の間がふれあう機会がある。また、複数チーム合同で練習や交流会を行うなどし、踊り子同士ではYOSAKOIソーランを通して交流が生まれている。また伊藤氏は、祭りを継続するうえでの重要な要素として、参加者が抱く「祭りへの愛着」を挙げる。

「一生懸命神経注いで活動された方々は、祭りに対しての愛着も非常に強く持たれていると思うし、そういったものも含めてすべてYOSAKOIソーラン祭りだと拡大解釈すると、お祭りとしての事業とか継続・発展を考えるうえでいいヒントになるのではないかと考えている。」⁸

さて、このように「YOSAKOIソーランに興味を持った人」を中心に広まったコミュニティの性格を考えると、祭りは松平（2000）のいう「合衆型祝祭」や伊藤（2005）の「脱中心的な構造」と同様の性格を持っていると考えたい。しかし、一部ではこれに当てはまり、一部ではこれに当てはまらない。伊藤（2005）によると、合衆型祝祭の特徴は、第一に「地域からの離陸」であり、祝祭の母体が地域住民をもつつみこんで地域集団から離陸し、地縁・血縁と無関係な社会縁の単位結合をつくりだし、それらが祭礼のための合衆をなすことである。第二に「見る・見せるの両義性」である。すなわち、氏子集団の閉鎖的な「スル」行為中心の祭礼に代わって、観衆をも包み込んで「ミル・スル」の両方が行われることが重要になり、しかもそれらは独立的ではなく、両義性を持つものとして機能していることである。第三に、「柔軟な内包・開放的な外延」であり、祝祭の構成単位は、特定の固定的な氏子集団や家ではなく個人の集合である。単位集合への加入脱退は自由で、単位集合相互間の交換も活発におこなれる。第四に、「開放型ネットワーク構成と増殖性」である。すなわち、祝祭のための合衆は、開放型ネットワーク構成をとり、その結び目は無限に広がる可能性を持つこと、また単位集合自体が簡単に分裂・合併し、増殖する可能性をもつこと。第五に「脱産業化と「楽しみ」の価値追求」であり、祝祭のための合衆は極めて短期間の結合で、日常生活との繋がりに乏しいこと、ここからは強固な生活共同体や生活組織が形成されにくい

⁷ 2021年8月6日 伊藤耕作さんインタビューより

⁸ 2021年8月6日 伊藤耕作さんインタビューより

ことである。

確かに、祭りは「合衆」の様相を呈している。実際に、YOSAKOI ソーラン祭りは北海道内外各地から参加者が押し寄せ、祭りの空間を形成しており、この点で「柔軟な内包・開放的な外延」「開放型ネットワーク形成と増殖性」という点は合致する。しかし、祭りの性格や準備・運営のプロセスや担い手の継承に注目すると、祭りでは「地域性」が意識され、地縁による結びつきが重要な要素であることが分かる。この点で、第一に挙げられている「地域からの離陸」という言葉から、YOSAKOI ソーラン祭りが地域社会とは無関係なものだと考えてしまうことは、適切ではない。

YOSAKOI ソーランは、祭りのコンセプトとして「ソーラン節」という地域性を重視しており、参加チームは「ソーラン節」を踊りに取り入れることにより、北海道のチームであるという地域への帰属を意識させられている。また、参加チームの中にも地域性やアイデンティティの表象が多く見られ、審査基準に含まれる「オリジナリティのある演舞」を生み出すうえで、地域への帰属を意識するチームが多いことが分かる。矢島（2015）も同様に、祭りのルールがその地の民謡などを取り入れることとなっているのをきっかけに、祭りを創る人々や参加集団がそれを“楽しく”表象化しているとし、まつりの「地域に戻る」方向性を指摘している。

また、祭りの維持においても地縁型コミュニティが欠かせない存在になっている。祭りを広く概観すれば、祭りに主体的に参加したい意志を持つ各チームや、企業、町内会が主体的に参加し、祭りを通して結合することで祭りの総体が出来上がっている。祭りの中心である YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会や YOSAKOI ソーラン祭り学生実行委員会が直接運営しているのは大通会場と西 8 丁目会場だけであり、多くの会場を各実行委員会が自主運営していることから、祭りが「脱中心的」であることは間違いではない。しかし、祭りに参加している各主体、いわばチームや企業、町内会がどのように運営、継承、維持されてきたかを考えると、そこには地縁のネットワークが機能しており、祭りの運営を支えていることが分かる。

YOSAKOI ソーラン祭りを通した「交流」は、確かに「地域から離陸していく」方向性を含んでおり、それは YOSAKOI ソーランの踊り子が札幌にとどまらず全国各地にコミュニティを広げていることや、YOSAKOI ソーラン祭りを拠点として全国各地に「よさこい系」祭りが展開されてきたことから明らかである。しかし、そうした交流を展開する手段として踊り子は「地域の一員であること」を表現する演舞を踊るのであり、そこには「地域に戻る」方向性がある。また、そうした交流を支える基盤として、祭りを支える地縁のネットワークがある。こうした背景をとらえたうえで、YOSAKOI ソーラン祭りの「交流」を理解することが必要だろう。

3-2-2 新琴似地域における YOSAKOI ソーランの始まり

本項では、前節で指摘した YOSAKOI ソーラン祭りの「地域性」について、特に祭りの担い手問題や維持継続の観点から具体的に明らかにしていきたい。YOSAKOI ソーラン祭りとかかわりが深い新琴似地域で、住民の間にどのように YOSAKOI ソーランが広がり、浸透していったか、その過程を探ってみたい。

新琴似では、YOSAKOI ソーラン祭り新琴似会場会場が継続して運営され、YOSAKOI ソーランチームの「新琴似天舞龍神」が地域に根付いた形で活動している。新琴似会場と新琴似天舞龍神は共に、1996 年に立ち上げられた。地域の若者のグループが新琴似天舞龍神を立ち上げるとともに、長谷川岳氏とともに町内会に依頼し新琴似会場を設置した。地域の若者グループというのは、新琴似天舞龍神を立ち上げた初期メンバーである。そのうちの一人が麻生のチームに参加したことを契機に、新琴似でもチームを立ち上げようと仲間を募った。その中には、今回取材を行った新琴似天舞龍神総代の梶浦宣明氏や新琴似会場の斉藤純氏も含まれる。

現在新琴似会場で事務局長を務める斉藤氏は、新琴似天舞龍神の立ち上げに関わったメンバーの一人であり、チームの代表も以前つとめていた。斉藤氏が新琴似天舞龍神に参加した動機はチームを通して新琴似地域を活性化することだったが、しだいに YOSAKOI ソーランの魅力にはまっていったと語る。幹部としてチームに関わって多くの時間を新琴似天舞龍神に費やし、そこにやりがいを感じていたようだった。

「踊りがすごく好きだったとかではなくて、地域の名前が世の中にもっと出ていったらいいよね、もっともっと新琴似ってみんなに知ってほしいよね。ということも思っていたので、私にとってはソーランに出ることは手段でした。一方でソーランに出たことでどんどんはまって行って、2010 年くらいまでの約 15 年間くらいは、それしかやっていなかった。1 年 365 日天舞龍神のために、天舞龍神と共に過ごしていた。仕事も間に合わないから朝ちよつと早めに行っていました。練習を 7 時とかから始めなきゃいけないから、なるべく早く行って練習して、終わったら事務所に行って打ち合わせをして最後に事務所閉めるのはあそこは 1 時とか 2 時とかで、朝起きたら 7 時くらいには会社行ってというのをやっていた。2 月くらいから本祭に向けて練習して、本祭終わったらイベントがあって、で 12 月くらいになったらそろそろ来年のこと考えるかといって、来年のことを考え始めたら 2 月で、というのがずーっと回っていた。気づいたら 15 年目でしたね。」⁹

新琴似会場も、新琴似天舞龍神の立ち上げと同じ頃に設立された。90 年代ごろから現在まで地域づくりの活動に深くかかわっているという斉藤氏は、「地域で祭りをやりたい」と

⁹ 2021 年 10 月 4 日 斉藤純さんインタビューより

いう思いから、町内会の役員に新琴似会場の設立を打診したという。

「新琴似会場を設置した経緯は、天舞龍神ができたときに一緒にスタートしています。実際には、96年の6月から会場がスタートしています。天舞龍神の関係者を中心に始めました。長谷川さんもいて新琴似でどうですかという話を貰って、じゃあうちもどうなんだろうねというところから始めました。今年で26年とかになるのかな。……『地域で祭りをやりたい』という熱い思いからでしたね。」¹⁰

また、新琴似会場の設立時から「審査委員長」として長年会場運営に関わってきた、新琴似連合町内会会長の下村晃氏や、現在実行委員長を務める、新琴似西連合町内会会長の高橋博章氏は、設立の経緯を語った。地域の若者グループは、新琴似在住の若者を中心に新琴似天舞龍神のメンバーを集めるとともに、新琴似に祭りの会場を設置するため、地域づくりに関わっている中年の方々に会場の設置を持ち掛けたのだという。文化施設のプラザ新琴似にて行われる町内会の会議に顔を出し、踊りを披露したそうだ。

「新琴似天舞龍神が新人王を取ったときに、『本祭では踊れるけど、(本祭が)終わったら踊る場がないんだわ』と言われて、そのときに『夏祭りに来て踊らないかい』、という話から(会場を立ち上げた)。だから天舞さんと一緒くらいのスタートでした。……当時私は、新琴似一番商店街の理事長をやっていたもので、その繋がりで声をかけられて。ちょうど会場をあっちこっちに作ろうという話になったときでしたから、うちの新琴似にも会場をつくろうという話になったんだと思います。」¹¹

「一番最初は〇さんが代表で8人くらいで話し合っ。新琴似でも誰かが音頭を取ってやるかという話になって。〇さんが代表にね。岳さんが2年〜3年くらいの頃にここに来たんだわ。」¹²

新琴似で会場をつくるには、町内会の協力が不可欠であった。こうして設立された新琴似会場実行委員会の部長クラスのメンバーは、ほとんどが単位町内会の役員である。新琴似会場実行委員会は各部にボランティアとして参加する住民についても、町内会の各部局や消防団のメンバーを中心に結成されている。地縁組織である町内会を基盤として、運営・維持が行われてきたことが分かる。会場実行委員会のメンバーは地域のその他の行事にも参加する人が多いという。

¹⁰ 2021年10月4日 齊藤純さんインタビューより

¹¹ 2021年12月9日 高橋博章さんインタビューより

¹² 2021年12月9日 高橋博章さんインタビューより

「普段はね、例えば女性部だと夏まつりをやっていたりするので我々も手伝ったりとか、テント立てるのを手伝ったりとかね。……持ちつ持たれつだね、まあこれごちゃまぜだから、音楽祭でもありながらソーランでもありながらテレビでもありながらって感じではあるけどね。消防団は、俺も消防団だから、今年もお願いね、みたいな感じかな。」¹³

従来の研究からは、YOSAKOI ソーランのコミュニティは、地縁との結びつきが薄い傾向があるような印象を受ける。しかし、新琴似会場実行委員会は町内会組織を基盤として成り立ち、現在も町内会員のネットワークの中で運営されている。町内会の中には消防団や、女性部などの部局がありそれぞれ行事を行っているが、新琴似会場の実行委員会と町内の部会の間には、「助け一助けられる」の関係性があり、会場の運営はその関係に支えられていることが分かる。したがって、YOSAKOI ソーラン祭りのコミュニティを一面的に「テーマ型」「脱中心的」とするのは、事実と反しているといえるだろう。

3章1節では、地縁型活動とテーマ型活動の事例を挙げたが、この意味でYOSAKOI ソーランはどちらの要素も内包しているといえる。逆に考えるならば、YOSAKOI ソーラン祭りを維持していくためには、地縁型のコミュニティとテーマ型コミュニティ両方の利点を踏まえつつ、住民のニーズに沿った活動をしていく必要があるといえるだろう。また、祭りは地域の地縁の衰退という課題に対する解決手段になるかもしれない。水平的で幅広いコミュニティの裾野を持ちつつ、地縁との密接な結合を持つYOSAKOI ソーラン祭りをきっかけとして、地域に関わる人を生み出すことができないだろうか。

3章1節では、町内会における、活動への参加者の減少・役員の高齢化といった課題、さらに、テーマ型活動の利点が町内会活動を活性化させる可能性について述べた。町内会活動について発信し、活動に参加してもらうきっかけが求められる一方で、テーマ型活動の持つ自由で緩やかなつながりが、地域内でのコミュニケーションのきっかけを生み出している。YOSAKOI ソーランも同様にテーマ型活動の特徴をもち、そこでのネットワークは自由でアソシエーション的であり、「YOSAKOI ソーランを見たい・踊りたい」という目的のもとに人々を集めることができる。一方で、そうして集まった場では地域のために活動する会場ボランティアの姿があり、踊り子や観客はその恩恵を感じるようになるだろう。

地縁に支えられた祭りであるからこそ、祭りとしても地域に還元し、相互関係の中で営まれる祭りにしていきたい。

3-2-3 学生のイベントから市民の祭りへ

ここで、新琴似からYOSAKOI ソーラン祭り全体について話を戻し、その変化について記述しておきたい。YOSAKOI ソーランは学生の熱意と勢いから走り出し、次第に社会的意義

¹³ 2021年10月4日 斉藤純さんインタビューより

が意識されるようになった。YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会が組織された所以は、「学生がやりたいことをやるイベント」から、「地域住民の祭り」への昇華が目指されたことにある。YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会事務局の伊藤耕作氏は、「公共財」という言葉を使い、YOSAKOI ソーラン祭りに対する認識の変化を語った。

「祭りを始めて当初は学生の勢いだけでやりたいことを始めたものが、以外にも多くの人たちを巻き込み、広がりを見せたので、この祭りを継続して運営していこうという考え方が発生するわけだ。そのときに、YOSAKOI ソーラン祭りは公共財、コモンウェルスであるという考え方が生まれて、“学生だけのものではなく皆のものにしていく”という形を表現するために組織委員会があります。」¹⁴

祭りが参加者を増やしながらか、空間的にも広がりを見せていく中で、祭りの影響力を地域全体に波及しつつ、祭りを長く続けていくことが目指されるようになった。

祭りが「YOSAKOI 好きのコミュニティ」にとどまらず、社会的に広くの主体を巻き込んでいることは、組織委員会に様々な地域づくりの担い手が名を連ねている様子にみてとれよう。組織委員会の理事は、観光局や高校の校長、マスコミ、銀行、商店街振興組合など幅広い分野の代表者が担っている。この意味で、YOSAKOI ソーラン祭りが社会にもたらす効果が、各方面から期待されていることが分かる。

また YOSAKOI ソーラン祭りは、祭りを支えるスポンサーのメリットの拡大を目的をし、賛助会員制度（サポート商店街）を設けることになった。賛助会員は企業が中心で、交通関連、旅行会社などの観光事業者および、衣装、音楽制作、総合プロデュースなどのよさこい関連の事業者が加入している。これらの企業は「サポート企業」として YOSAKOI ソーラン祭りのホームページの「YOSAKOI サポート商店街」のサイトに紹介されている。年会費制となっており会費は寄付に近い形であるが、祭りの中で「YOSAKOI サポート商店街」を広報することで、企業にメリットをもたらすようつとめている。

ほかにも、祭りは市内だけではなく北海道全体に YOSAKOI ソーランの影響を波及させるため、支部制度をつくり道内各地に踊り子や支部大会の運営者を中心とする支部会議を設けている。伊藤氏は、支部を拠点として各地域のイベントにチームの参加を促しており、各支部を中心に「YOSAKOI ソーラン祭り支部大会」を開催することで、交流の拡大を図っているという。

祭りがこのように、社会的に広がっていく一方で、祭りの担い手であるチームには課題がある。伊藤氏はチームの課題として、「30年たつて、平岸や天舞等のような、お祭りを代表する層の厚いチームがなかなか育っていないこと。原因として、YOSAKOI ソーラン祭りの在り方が固定化されて面白みがなくなってきたということがあると思う。」と語り、参加者の層が厚いチームが育っていないことを挙げた。

¹⁴ 2021年8月6日 伊藤耕作さんインタビューより

また伊藤氏は、祭りの社会的な意義を広げていくために、祭りに関わる主体それぞれが、祭りのあり方を考えることが重要だと語る。

「協賛企業であれば一緒にまちづくりしてもらいたいと思うし、主催団体でいえば収支の利害だけではなくて、(いかにこの祭りが効果効能として、市民のためになっているか、経済、市民生活、生きがいやりがいという部分で、)『YOSAKOI ソーランとは何かということ』を皆さんにも考えてもらうことが重要なのではないかと思います。」¹⁵

祭りは30年の歴史の中で、地域住民や企業など社会から広く支えられるようになり、「公共財」としてのあり方が問われるようになった。その中で地域の様々な主体が理事として祭りの運営組織である「YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会」を組織し、祭りを長く続け、祭りの効果を地域社会に波及させることが目指されている。実際に、サポート商店街の制度や支部大会の開催によって、「祭りの効果」を幅広く波及させる工夫がなされている。

一方で、祭りを盛り上げる層の厚いチームを育てることや、祭りに積極的に関わり、祭りのあり方について考える主体を増やしていくことなどが課題としてあることが分かる。

次項では、祭りの諸課題について焦点を当てていきたい。

¹⁵ 2021年8月6日 伊藤耕作さんインタビューより

3-2-4 祭り運営上の諸課題

3-2-4-1 祭りの縮小

祭りは30回を迎えたが、担い手の主体性の低下や新規チーム立ち上げの難しさ、地方会場の縮小などの課題がある。

YOSAKOIソーラン祭りの観客動員数は、2003年ごろから前回祭りが開催された2019年まで横ばい状態を維持している。一方で、祭りの参加者層は2006年をピークに若干の減少傾向にある(図6)。また、祭りの盛り上がり貢献してきた札幌市内各地に設置される地方会場の数も、2006年ごろから減少傾向にある(図7)。道内でのテレビ中継の枠も、以前より縮小しており、祭りにはいっそうの活性化が求められる。

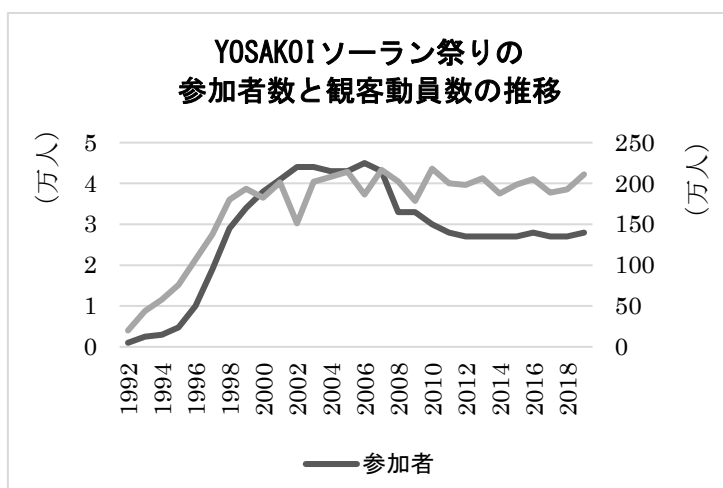


図6 YOSAKOIソーラン祭りの参加者の減少

「YOSAKOIソーラン祭り公式ホームページ」を基に筆者作成

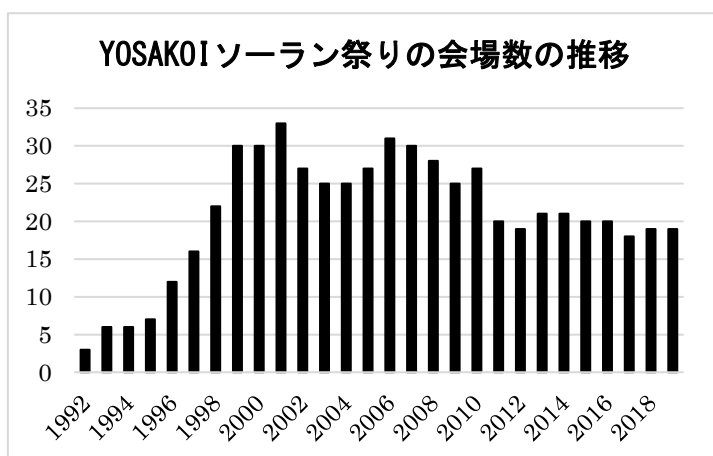


図7 YOSAKOIソーラン祭りの会場数の減少

「YOSAKOIソーラン祭り公式ホームページ」を基に筆者作成

3-2-4-2 担い手の主体性の低下と世代交代の困難

YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会の伊藤耕作氏は、学生実行委員会の主体性が低下していることを祭りの課題として挙げた。学生実行委員会は祭りの中心となる「西8丁目ステージ」の企画・運営に関わる組織であることから、祭り全体の雰囲気づくりに関わる存在なのである。伊藤氏は、祭りのイノベーションにおいて、「学生の発想力」の重要性を語る。

「学生実行委員会という組織は年月が経つにつれ、主体性が変わってしまう。初期のころは立ち上げの世代が近いがゆえに、お祭りは自分たちのものであるという、スタッフの祭りへの『所有感』が強かった。現在は『自分たちが作るんだ』という主体性・所有感が初期のころよりは薄れている。……その年に入ってくる子たちに向き合ってやっていくのが事業として難しいところ。」¹⁶

祭りが回数を重ねる一方で、祭りの企画・運営に参加してくる学生は長くても4年単位で交替してしまう。その中で学生の祭りに対する所有者意識が薄れていくことが、祭りに対する主体性の低下につながっているようだ。

また、学生は地域との結びつきが薄く、学生チームを引退した後にまつりとの関わりが薄くなるケースも多いようだ。新琴似会場の斉藤純氏は次のように語る。

「学生は、就職してからも、やめないでかかわってねと思う。1年目2年目大変なんだろうし、北海道はなれちゃう子も多いと思うんだけど、たぶんその地域地域で何らかのかかわりはできるはずなので、折角かかわったから、関わってほしいなとおもうよね。」

17

祭りの担い手は、踊り子として祭りに関わった学生が引退した後も、祭りの担い手としてチームを祭りに関わり続けることを望んでいることが分かる。祭りの実行委員会は大学生や専門学校生を中心とした組織であるうえ、大学生チームや大学生・企業合同チームは祭りの中で存在感が大きい。また、組織委員会が設ける支部制度のうち、学生専門の支部を設けていることは、学生の存在が祭りの中で重要な要素であると捉えられていることを示している。そうした存在である学生を、祭りの新たな担い手として取り込んでいくことは、大きな課題である。

一方、新琴似会場においては、担い手の高齢化が問題であると、新琴似西連合町内会会長で、新琴似会場の実行委員長である高橋博章氏は語る。新琴似会場は発足のころから、中年層の担い手が多かった。その理由は、当時祭りに関心を持った若い層は、「新琴似天舞龍神」の踊り子として参加していたからである。それから25年余りが経過した現在、祭りの担い

¹⁶ 2021年8月6日 伊藤耕作さんインタビューより

¹⁷ 2021年10月4日 斉藤純さんインタビューより

手が非常に高齢化していることは想像に難くない。また、実行委員会の基盤となっている町内会活動で若者の参加者が減っていることは、会場の世代交代を妨げている要因となっている。新琴似会場では一昨年から、町内会員以外からも会場運営の担い手を取り込もうと、実行委員会としてパートナーを募集している。しかし、現状ボランティアのほぼ全員が町内会を媒介として実行委員会に参加している現状を鑑みると、町内会における担い手の問題を解決することは、やはり重要な課題である。町内会や会場実行委員会の活動に若い人を取り込むために、高橋氏はベテランメンバーの意識改革が必要であると語った。

「それでもだんだんね、(町内会のつながりが) 薄れてきているんだよ…… t y 一番の課題は、お金もそうだけど担い手だよ。担い手は全部やっている人方が自分で壊していると、私は考えている。お祭りが好きな若者はたくさんいるんだから、だから好きな人をとにかく来てもらえるように(しなければならぬ)。そして来た時の対応が悪い。若い人が来てくれるところまではいいんだけど、準備が始まると、年寄りの悪いところが出るの。初めて来てわかんないから、何やったら何したらいいんですかというよね、もっといえばこっちから言ってあげればいいんだけど、まあ(若手がベテランに) 聞くでしょ、そしたら『お前よお、自分で見て覚えろ』って。あんな言い方したらさ、みんなすぐにいなくなるよ」¹⁸

祭りの担い手に焦点を当てると、第一に、祭りが回を重ねるごとに担い手もつ祭りに対する所有者意識が薄れ、祭りに対する主体性が低下していることが分かる。祭りが始まった当初に参加した人々は、「祭りを自分がつくった」という自負や、「自分が祭りを変えるんだ」という意識が強く、そのエネルギーが祭りを拡大させる原動力だったのかもしれない。第二に、祭りの担い手として学生の力が占める割合が大きいことが、祭りを継続するうえでの課題となっていることが分かる。学生のエネルギーは、祭りの発展に影響してきた一方で、祭りを離れていく学生が多いことが、祭りの担い手にとっての課題になっている。第三に、町内会組織が基盤となる地方会場では若者が取り込めず、担い手の高齢化が進んでいることが分かる。

祭りの継続のためには、祭りの担い手が主体性を持って祭りに関わること、祭りに愛着を持ち関わり続けること、祭りに新たな世代を取り込むことが必要である。

3-2-4-3 祭りのイノベーションの難しさ

さらに、伊藤耕作氏は祭りの課題として、「祭りのあり方が固定され、面白みが無くなっていること」を挙げる。YOSAKOI ソーラン祭りの原点は、学生が新しいイベントを持ち込み、その目新しさに感動した住民が参加の輪を広げていったという過程にある。祭りを運営する中で、「目新しさ」「チャレンジ」といったものが意識されている。しかし実情として、

¹⁸ 2021年12月9日 高橋博章さんインタビューより

祭りが継続していく中で、そうしたものが失われていくことが懸念されている。

「YOSAKOI ソーラン祭りの在り方が固定化されて面白みがなくなってきたということがあると思う。各チームが当初始めたときは、皆さんすごくかっこいい踊りを目指していたというより、楽しいことをやりたかったんですよね。……それはチャレンジ・面白みといったポイントなのだと思うんですね。それが今、継続とのバランスの中で、チャレンジや進化が面白みとして失われているのではないかと。継続というもののほうが優先されすぎているのかな、と思います。」¹⁹

「そういうもの（踊りとしての芸術性を強調した祭り）を形つくってきたので、参加者がそれしか見ていないというのがある。今はそういう世界観しか見せていないので、参加者はその世界観を楽しむために入ってくるわけですが、違ったところにも YOSAKOI ソーラン祭りはきっとあって、新しい世界観・面白みは事務局がニーズを捉えて発信していかなければならない。ただ、それをビジョンとして具体化することはまだできていなくて、それも一つの課題。」²⁰

祭りはこれまで、祭りの最終日に行われるファイナルステージに力点を置き、祭りの芸術性が強調されてきた。伊藤氏は、「踊りとしての芸術性」を求める祭りの形が参加者のニーズとなり、祭りをつくる側もそちらに傾倒していると語る。さらに、づくり手の側から参加者に新たな祭りのあり方を提案することが必要だが、そのビジョンを示すことが今後の課題であると語った。

一方、ファイナルステージに力点を置く祭りの形は、新琴似会場や新琴似天舞龍神の活動とも密接につながっている。これについては後述するが、チームと会場は相互に関わり合っており、会場はチームが地域を盛り上げてくれることを期待し、チームは結果を出すことで地域の知名度を上げ、会場に恩恵をもたらそうとする。ファイナルステージはテレビ放送でも取り上げられ、人々の注目度も高い。そこで「YOSAKOI ソーラン大賞」を受賞することは、チームと地域にとって影響力のあることであり、ファイナル審査がチームの活動意義になっていることも事実である。

3-2-4-4 祭りの資金難

また、YOSAKOI ソーラン祭りは、祭りの運営資金に関する課題を抱えている。この課題は上で述べた担い手の主体性や発想力といった課題と、密接なつながりがある。

行政に頼らず自主財源で運営する YOSAKOI ソーラン祭りは、スポンサー費・参加費・チケット代から収入を得る事業型 NPO であり、収入が 6 月の本祭に偏っている。ゆえに、6

¹⁹ 2021 年 8 月 6 日 伊藤耕作さんインタビューより

²⁰ 2021 年 8 月 6 日 伊藤耕作さんインタビューより

月の本祭に観客を多く動員することが、巨大な祭りの事業を維持するうえでの重要な要素となっているが、このことは祭り全体の運営を不安定なものにさせている。祭りの主体となる学生がクリエイティブな企画をできる環境を整えるため、財政を整えることと、年間の活動を事業化することが喫緊の課題であると伊藤氏は語る。

「活動環境を整えること＝”資金をいかにつくるか”ということも難しいところです。…全体として事業形態が不安定である、6月に偏りすぎている、年間の活動を事業化できていない、ということが目先の課題ではありますかね。そこが解決すれば学生くんたちにも活躍してもらい場所が増やせるかもしれないし、6月のYOSAKOIソーラン祭りもより魅力的にしていけるかもしれないとは思っています。」²¹

また、少し事情が異なるが、新琴似会場においても祭りを支える資金不足が課題となっている。新琴似会場のような地方会場では、チケットを販売しておらず、無料で会場を解放している。そのため、祭りの運営資金は地元の住民・企業からの寄付に頼っている。新琴似会場の斉藤純氏によると、祭りの運営資金は100万円程度であり、ボランティアに十分な昼食を用意できていないという。

「そもそも会場の運営費って、全部寄付金なんだ。もうここにいる人たちみんなが手分けして集めたり、単位町内会から出してくれたり、一人一人から集めたりとか、ですから非常に貧乏所帯です。…手伝いに来てくれる人たちにも、当日はおにぎり2個と小さいお茶しか出せない。で、帰りにビール一本持ってもらうくらいが関の山です。」²²

本来、祭りの担い手が祭りづくりを楽しむためには、祭りが余裕を持って運営できることが望ましいだろう。しかし、祭りの事業形態上、祭りの資金を祭りの運営主体が自前で確保する、地元住民や企業からの寄付をかき集めるといった方法で賄われており、これは祭りの担い手にとって大きな負担となっている。

「公共財」としての祭りをより手厚く支え、担い手・参加者両方が祭りを楽しみ、やりがいを持つ祭りにしていくことができないだろうか。そのためには、祭りを守り、支えていく意識を担い手だけでなく、社会全体に広げていくことが必要である。

3-2-4-5 住民からの声

ここまでの議論で、祭りの担い手を取り込むことや、祭りの社会的な意義を発信していくことが祭りに求められているとしてきた。その意味で若者の参加者を今後も取り込んでい

²¹ 2021年8月6日 伊藤耕作さんインタビューより

²² 2021年10月4日 斉藤純さんインタビューより

くことや、祭りを応援する地域住民を増やしていくことが必要だ。祭りは現在、地域住民にどのようなとらえられているのだろうか。以下では祭りへの「不参加住民」を含め、様々な住民からの声を拾い、祭りに対する住民の意識を明らかにしたい。なお、踊り子や地方会場ボランティアの祭りへの意識については、次節以降で議論する。

以下では、新琴似住民へのインタビューで得られた回答から、祭りに観客として参加し、祭りに対して前向きな印象を持つ住民の声を上げる。60代の女性2人は、友人や家族が踊っている姿を見たことをきっかけに、その姿を「楽しそう」「いいことだ」とよい印象をもっていた。また次の70代の女性と60代の男性は、知人に踊り子はいないものの、新琴似会場での演舞を毎年見ているようだ。

「会社に勤めているときに、何人かよきこいをやっている人がいたので、とても楽しそうでした。好きな人にとってはいいことだなと思います。大変そうだけど楽しそうでしたよ。大変そうというのは、仕事を終わってから練習に行くし、お金もかかるし、ということでした。」(60代女性：観客)

「見に行き始めたのは、YOSAKOI ソーランが始まったところから、15年くらいはみていたかもしれないですね。姪っ子がやっていた6年～7年前まではみていましたね。それで、天舞龍神もすごく仲のいい友達が入っていて、今も踊っているんですよ。だから彼女の応援も、姪っ子が入る前は、彼女の応援に『がんばって』と言いに必ずどこかの会場には見に行っていました。」(60代女性：観客)

「YOSAKOI ソーラン祭りは見に行ったことはありますが、参加はないです。見に行ったのは新琴似(会場)と大通り(会場)とです。毎年見ているので、いつからかは覚えてないですね。おやつを買いに行くときに、通りすがりで見る感じ。YOSAKOI ソーラン祭りを見て、男の子たちとか、『若くていいなあ』と試してみてる。」(70代女性：観客)

「11時から3時ごろまで見に行っているよ。あそこでやっているだろう。5～6年前に大阪からこっちへ引っ越してきて、それからだ。2年なかったから4年続けて見に行ったんだな。大阪へおるときから、YOSAKOI ソーラン祭りはええなと思っていた。きれいだがな、衣装がきれいだしな。」(60代男性：観客)

次の2人の女性は、観客として祭りを見に行っているが、祭りに踊り子として参加することはないという。自分が参加するにはハードルが高い、若者の祭りだと認識しているなどと語る。

「音も聞こえてくるし、何かな、という感じでいつも見に行っています。新琴似天舞龍神は知っていますが、名前は聞いたことがありますという程度です。……世代間で交流することはとてもいいことだとは思いますが、自分が参加するとなるとハードルは高いかなと思います。」(60代女性：観客)

「参加したことはないです。若者のお祭りだと思っているからです。」(60代女性：観客)

また、中には祭りに対して批判的な声もある、祭りの踊り子が「我が物顔」で道路を占拠している様子を嫌悪感を覚え、それ以降祭りに関心を持ったことはないとする。

「YOSAKOI ソーラン祭りは、好みでないから参加したことも見に行ったこともありません。印象としては、いい印象ではないです。最近はどうかは知らんけど、以前は我が物顔に振る舞う輩が多かったのもあって、あまり最初からいい印象を持っていない。今は分かんないよ、あくまで当初はね。ずっとここに住んでいて、最初にそう言うのを見かかかって、それ以後、見に行かないし興味も持たない。」(60代男性：不参加住民)

新琴似の地域住民からは、知人の参加がきっかけで観客として参加したという声、通りすがりに目にして好印象を持ったという声、祭りに主体的に参加しようとは思わないという声、祭りに嫌悪感を抱いたという声など、様々な声が聞き取れ、祭りに対して様々な感情や意見があることが分かった。

ここから、住民の総体としての祭りに対する意識を探ることはできない。しかし、住民に寄り添って祭りのニーズをとらえ、幅広く参加者を広げることの難しさを実感させられる。

3-2-5 新琴似天舞龍神の活動と地域への浸透

3-2-5-1 新琴似天舞龍神を通して生まれる住民交流

新琴似天舞龍神では、幅広い世代が参加するチームの中で交流の機会が生まれている。チーム内では幅広い年代が参加し、創成高等学校の生徒や興正学園の児童が参加するなど地域ぐるみで交流が生まれている。チームには小学3年生から60代まで幅広い世代のメンバーが所属しているが、踊りという共通点を通してコミュニケーションが生まれるという。

チームに参加する20代の男性は、多世代交流の魅力について語る。

「チーム活動は老若男女層が厚いので、他のチームに無いところが、一緒に踊っていて楽しいし、という感じで。皆フレンドリーで。ぼくはDM(ダンスマネージャー)をや

っていて子供を担当するんですが、基本的に踊りのことだとか、元気なさそうだったら『学校でなんかあった？』みたいなことを話します。」(20代男性：新琴似天舞龍神 踊り子)

実際に新琴似天舞龍神の練習に参加してみると、練習の前後や休憩時間に和気あいあいとした空気を感じられる。以前チームに所属していた新琴似会場の斉藤氏も「ガチャガチャして、家族みたいな感じでしょう」と語る。様々な世代が集まったチームであるが、演舞を通して共通の話題が生まれ、コミュニケーションが可能となっているようだ。

また、小道具のサポートや演舞のマネジメントにおいてはベテランのメンバーがチームを引っ張ることで、円滑なチームワークが成り立っている。学生時代からよさこいに関わり、数年前に他のチームから新琴似天舞龍神に移籍したメンバーは、チームに対する意識の変化を語った。

「ここに入ってから(チームの運営について)あんまり意識したことはないですね。ついていけばいい先輩たちがどっしりいてくれているので。でも話せばその差は感じるほどでなくて、みんな仲良くしているからね。親族の集まりみたいな感じですね。」(20代女性：新琴似天舞龍神 踊り子)

以前所属していたチームは、社会人と学生合同のチームであったが、若い層が多いうえ入れ替わりが激しく、自身も運営に携わることが多かったという。一方で新琴似天舞龍神では、ベテラン層がチームを引っ張ってくれている安心感から運営について意識したことはないという。ベテランメンバーに話を聞くと、「やるときはやる、休むときは休む」というメリハリのある空気感をつくっているようだ。若手のチームにはない練習の安定感、チームの魅力なのかもしれない。

YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会の伊藤耕作氏は、新琴似天舞龍神を「層の厚いチーム」と語ったが、実際に新琴似天舞龍神では幅広い世代が参加しており、その背景にはYOSAKOI ソーランを踊るという共通の目的があることが分かった。子供と大人、若者と高齢者といった異なる属性のメンバーの間でも、踊りという共通点を通して交流のきっかけが生まれているようだった。また、チームに長年所属するベテランメンバーが所属していることは、若者や新しく参加してきたメンバーの安心感につながっていることが分かる。

3-2-5-2 新琴似天舞龍神の地域への浸透

祭りが回を重ねるにつれて、新琴似天舞龍神は地域に浸透し、地域を代表するチームに成長した。2010年まで新琴似天舞龍人の代表を務めていた新琴似会場の斉藤純氏は、地域住民からの反応の変化について語る。

「はじめは北海道入ってなかなか冷ややかなところもあって、『何やっているの?』、『うるせえ祭りやってんな』というようなところから、天舞龍神としても10年くらいやってきた前後から、だんだんだんだん地域の方々から、……『うちのチームさあ、平岸にくらべたら…』と語ってくれるようになってきたとき、あ、これはすごい嬉しいなあと思いました。……うちの地域で会場をやっていたり、うちが会場だったり、“自分のうちのもの”みたいなのところが出てきているのかなあと」²³

また、新琴似天舞龍神の踊り子の女性は、協賛活動を通して地域住民から、チームに対する期待と温かさを感じたと語る。

「協賛周りはコロナになって、心苦しい気持ちで行ったのに、地元の方は『天舞なの? がんばってきてね!』と結構応援の声が多くて、意外と優しい人が多くて、そういう町なのかと思いました。」(20代女性:新琴似天舞龍神 踊り子)

街頭インタビューでは、新琴似住民から新琴似天舞龍神に対する感情を探った。チームに対し、踊り子の全力な姿勢に好印象を持つ住民の声が目立った。

「新琴似天舞龍神は知っていますよ……皆さんすごい一生懸命しているなというのは分かりましたね。なんかすごい、命といえば大袈裟ですけど、すごい力を入れているというのは分かりますよ。夢中になるものがあることは、いいことだなあと思っています。」(60代女性:観客)

「それで、天舞龍神もすごく仲のいい友達が入っていて、今も踊っているんですよ。だから彼女の応援も、姪っ子が入る前は、彼女の応援に『がんばって』と言いに必ずどこかの会場には見に行っていました。…祭り自体を、というよりその人を応援したいという動機です」(60代女性:観客)

「新琴似天舞龍神については知っています。すごくうまくて毎年テレビの前で、優勝しろって応援していました。お父さんお母さんもお祭りやイベントが結構好きなので。テレビの放送は、最近は見ませんが前は見ていました。」(男子高校生:観客)

「祭りは見に行きます。そこのマックスバリューのところですね。テレビで見るのの比べるとその時は少ないなと思ったけれど、元気が出るというかね。」(60代女性:観客)

²³ 2021年10月4日 斉藤純さんインタビューより

また、地域での活動をきっかけにチームに親近感を感じているという声もあった。新琴似天舞龍神の幹部は、地域の展示会やイベントの設営の手伝いに参加している。こうした活動が住民との距離を縮めている。

「作品展の時に天舞龍神さんはボランティアできてくれたりするので、身近ですごく。……色々物を展示するときに、台とか伯符を出したりするんですよ。それを全部ここ所属している団体として新琴似天舞龍神さんの人たちがすごくボランティアで来てくれるので。年代としてはおじさん方ですね、『すごい、テレビでインタビューで答えている人だこの人』とかミーハーな感じで見えています。」(60代女性：観客)

また、新琴似天舞龍神においては、チーム総出での協賛活動により地域住民との交流を図っているという。チームのコンセプトとしても、「地域の活性化」を掲げ、メンバーに対しても、地域への感謝を強く発信している。

「我々は地域を挙げて大賞を取るということだから、チームを作って、小学生も中学生も高校生も大学生もOLもサラリーマンも年配の方も入れて、そして地域のみなさんに応援してもらってYOSAKOIソーラン祭りに出て、結果を残して地域に恩返しをしよう。それがみんなで感動を共有できるということだから、……ただ、『YOSAKOIソーラン好きで集まれー』ってやって、『はいお祭り出るよー』ってやっていたら、たぶんチームは崩れていると思う。壊れていると思う。」²⁴

新琴似天舞龍神総代の梶浦宣明氏は、チームが続いてきた条件として、「地域のためのチーム」であったことを強調している。YOSAKOIソーランを踊ることを目的としているのではなく、地域に応援してくれる住民がいて、それにこたえるために活動することが前提だと語る。

新琴似天舞龍神ではその理念に基づき、チーム総出での協賛周りを行っているという。新琴似在住・非在住を問わず、すべてのメンバーが年3回、新琴似地域の事業所をめぐり協賛金を集めているという。協賛周りを通してメンバーと地域との接点を作り、メンバーの地域に対する感謝と愛着を育てる狙いがあるという。

「お金貰った人はくれた人たちにすごい感謝するわけだよね。『私たちが行ってお金貰えた!』と感謝するわけだよね。そしたらその人たちにどうやって返そうかという、踊りで返すしかないよと言っているわけだから、なおさら頑張れるわけだよ。……地域のみなさんは『わが町の代表だ』という思いでお金出してくれているでしょ。お祭りに出させてもらっているわけだから、そういう熱い思いを持ってくれている地域のみな

²⁴ 2021年10月7日 梶浦宣明さんインタビューより

さんに恩返しをするには、結果で返すしかないんでね。」²⁵

実際に新琴似会場の担い手からは、新琴似天舞龍神を通した地域の活性化や発信力に期待する声がある。

「YOSAKOI どうするという壁に突き当たったのさ。それがね、いまから10年くらい前だね。……『みなさんYOSAKOI ソーランの天舞龍神は世界に名前を売ってくれているんだよ。洞爺湖サミットがあったからね。そんなチームを、今壁にぶち当たったからといってやめたらいけない』とあった。やろうとあった。」²⁶

地域に密着したチーム運営が行われてきた一方で、幹部と比べるとメンバーの地域への関心が低いという課題もある。チームの活動以外では地域の活動には参加しないというメンバーも多かった。地域に根付いてチームを運営するまでには、踊り子の意識があがっていないことも課題である。メンバーの中には、協賛周りを通して地域からの応援を感じるメンバーもいるが、「(協賛周りは) チームの維持のためだから…」と地域に対して強く関心を示さない人もいた。

現在チームを運営している幹部は地域との結びつきが強く、そのネットワークを生かしてこれまでチームを成長させてきた。梶浦氏は町内会の役員ではないが、町内会や神社には知り合いがいて、いつでもやりとりができるのだと話す。

「俺は特別何も入っていないんだけど、商工会も町内会も神社もなんでもどこでも知っている人がいるので、いろんな新琴似の人が役割をやっていて、全部知っている人がいるから、何かお願いしたいといたら、『この人だ』となってくるわけだね。」²⁷

しかし、今後チームを担う若い層に、そのようなつながりを持った人が少ないことが課題である。梶浦氏は、世代交代と若いメンバーと地域との繋がりについて次のように語る。

「世代交代はできていないよ。この間、世代交代もしていかなければと思うけれど、踊り子から上がってくる人を入れるわけだからね、踊り子はあくまでも踊りたくて来ている人たちで、いざ中枢の中に入って何かを考えると、何かをやるというところまでは考えられない。……地域に根付いているということで、地域じゃない人はなれないんだわ。……だから若い方がいいのがあるけど、新琴似以外の人だったら新琴似の人と関わりないから、やっぱりある程度新琴似の人と接点がないと、会場間のやりとりだとか、いろ

²⁵ 2021年10月7日 梶浦宣明さんインタビューより

²⁶ 2021年12月9日 高橋博章さんインタビューより

²⁷ 2021年10月7日 梶浦宣明さんインタビューより

んなことが町内とつながっているとか。じゃないとなかなか天舞龍神の看板背負って天舞龍神ですって言っても、通用しないんだわ。……ましてね、サラリーマンだったら普段は会社にいるから地域と接点ないでしょ、そうするとなかなか地域とのかかわりが持てないから、あまり親しくなっていけないんだよね。本当に、次の世代交代が非常に難しいんだわ。天舞龍神も。」²⁸

また住民へのインタビューの回答からは、YOSAKOI ソーランや、新琴似天舞龍神に対して否定的な意見を持つ住民や、無関心な住民も存在することが分かった。

「新琴似天舞龍神は知っています。以前は身近で参加している人もいましたので応援していました。今は少し距離を感じていますかね、何をやっているんだろうなという感じがちょっとあります。」(60代女性：不参加住民)

「新琴似天舞龍神はうまいけどな、古いわ。あんなんあかん。あれは勝てんぞ。一位にならんのがきにいらんみたいやけどな。おばあちゃんが多い。若い方が見るって。可愛い、元気もらえるような踊りがええな。」(60代男性：観客)

「YOSAKOI ソーラン祭りを見て、男の子たちとか、「若くていいなあ」と思っている。新琴似天舞龍神については、見たことはありますが、何も思っていない。」(60代女性：観客)

「新琴似天舞龍神は知っています。テレビでは見るけれども、そんなに関心を持ったことはないです。」(60代男性：不参加住民)

YOSAKOI ソーラン祭りでの結果は、チームへの協賛に結びつき、影響している。連合町内会の下村氏や西連合町内会の高橋氏は、新琴似天舞龍神の YOSAKOI ソーラン祭りでの結果は、新琴似会場への観客数や協賛の集まりと結びついているのだと語る。

「さっき言ったように10年くらい前にどうするって言って、それから変わってきているから。だんだんよさこいも協力してくれるようになったけれども、あとはなんか目標がなかったらやりがいがないからね。目標として一番先にあげたいのは、天舞龍神そろそろ優勝してくれって。いつまでも賞がなかったら集客もできないし、頼むわってこれ要望だね。四連覇となれば黙ってても手伝う人も入るし、お客さんも来るんだ。」²⁹

²⁸ 2021年10月7日 梶浦宣明さんインタビューより

²⁹ 2021年12月9日 高橋博章さんインタビューより

高橋氏は会場運営側として、新琴似天舞龍神に結果を出し、チームと地域の名前を発信することを望んでいる。YOSAKOI ソーラン祭りの大賞受賞は、地域にとって大きなインパクトである。新琴似天舞龍神が4年連続大賞を受賞した当時、会場には新琴似天舞龍神を見るために多くの観客が来場し、会場への寄付も多く集まっていたという。新琴似天舞龍神は2004～2007年に「YOSAKOI ソーラン大賞」を受賞し、2008年から2010年まで「準 YOSAKOI ソーラン大賞」を受賞したが、2011年～2015年はファイナル進出ができない年が続いた。チームが結果を残せない場合、会場への寄付や来場客は減少する。会場とチームの密接な関係がうかがえる。

新琴似天舞龍神が長年維持・運営されてきた背景には、チーム内では自由に出入りができるテーマ型活動を採用し、熱意を持ったメンバーによって活動が行われる一方で、チームと地域の他の主体とが幹部陣の地縁に結びついた密接なネットワークのもとに、関係性を維持し、活動の基盤を守ってきたという経緯がある。YOSAKOI ソーラン祭りに層の厚いチームを増やし、祭り全体を活性化するために、祭り全体としてテーマ型のアソシエーション的な関係性一辺倒ではなく、地縁ネットワークの重要性を認識することが必要だということがわかる。

3-3 開始から 30 年を迎える現在において新琴似と YOSAKOI ソーラン祭りが抱える課題

3-3-1 祭りに参加者・担い手を取りこむこと

本節では、3 章 1 節～2 節で明らかにしてきた、新琴似における YOSAKOI ソーランの展開を踏まえ、新琴似地域と YOSAKOI ソーラン祭りの今後の課題について明らかにしたい。YOSAKOI ソーラン祭りが住民にとって有益な「公共財」として影響をあたえ、長く続けられるために、どのような取り組みが求められるのだろうか。

まず第一に、祭りにより幅広く、住民を取り込んでいくことが必要である。新琴似住民への聞き取りの結果、祭りに観客として参加する住民がいる一方で、踊り子として参加することには消極的な住民や、祭りに否定的な意見を持つ住民もいることが分かった。また、地方会場の担い手の中にも温度差があり、一部で祭りへの愛着が育まれていないことが課題だと分かった。

祭りは様々な企業からの寄付や、地域住民の寄付、町内会でのバックアップによって成り立っており、その効果を地域に還元していくことが求められる。イベントについては、金井（1999）などが述べているようにそれ自体が目的ではなく、それを契機として地域振興につなげていくことが重要であり、菅野（2011）が述べているように、衰弱する共同体の社会的紐帯を再構築・強化することが期待されている。

祭りが一部の「YOSAKOI 好き」のためのイベントに始終してしまえば、本来の地域の振興・交流の活性化という目的を見失いかねない。祭りに住民を取り込み、祭りを担っていく住民を育てていくことが求められる。

3-3-2 地域住民への還元の必要性

つづいて、地域住民への還元の必要性を挙げる。上の課題を乗り越えるために、YOSAKOI ソーラン祭りが地域住民にどのようなメリットをもたらすかを考えなければならない。祭りは、交流の促進をその意義として掲げているが、「公共財」である YOSAKOI ソーラン祭りは、多くの地域住民にとって有益な交流を生み出せているだろうか。

地域の自治を担い、住民の交流の基盤となってきた町内会組織は、高齢化が進み、課題が蓄積している。前章で述べたが、新琴似の町内会組織においても、活動への参加者の減少や役員の高齢化が課題である。これらの課題に対して YOSAKOI ソーラン祭りを処方箋として機能させることはできないだろうか。例えば、新琴似会場で生まれる交流をより豊かなものにし、参加者に満足感を感じてもらうことによって、町内会活動への参加のきっかけとすることができないだろうか。

新琴似会場の担い手の様子について聞くと、担い手の中には会場運営を通して、やりがいや有益な交流を十分に感じていない人がいるようだ。会場の運営に関わるメンバーは、町内

会に属していることを理由に運営に関わっている。新琴似会場に関わるメンバーの多くは、祭りに対して強い動機があるのではなく、町内の活動の一環として参加しているようだ。

「そんな好きで関わってくれる人はほとんどいなくて。もちろん『祭りいいね』とか皆言ってくれるし、『年に一回だしな!』と言ってきてくれるんだけど。俺とかみたいに長くソーランに関わっていてすごく愛があってどうの!という感じではないよね。やっぱり、地域のことだからといってきてくれる。」³⁰

このような住民に対して祭りへの参加がより意味のあるものになるようにしていきたい。高橋氏は会場の担い手が祭りを主体的に楽しんでいないことを問題として挙げ、祭りを盛り上げ、担い手を増やしていくために、会場の担い手が楽しむことが必要だと語る。

「やっぱり一番はさ、やっている人が楽しんでいない、というのが一番の問題だと思っている。楽しんでやろうと、面白くないと手伝いも来たくないでしょう。楽しみを自分で見つけてやりましょうって」³¹

しかし、祭りの特性上、人数的にも時間的にも、担い手が祭りを楽しむ余裕がないことも課題であるようだ。新琴似会場の運営によって生まれる住民交流は、限定されている。会場のメンバーは固定化され、高齢化が進んでいる。そして、会場ボランティアは当日のタイトなスケジュールゆえに、ゆっくり演舞を見たり打ち上げに参加したりすることができない。また、祭りに関心を持つ若い住民は、踊り子として祭りに参加するため、会場には参加していない。3章2節で挙げた祭りの資金難の課題も、ボランティアに十分な昼食を出せないことに繋がっており、この問題の一因であるといえよう。祭りを支える主体を現在の担い手だけではなく社会全体に広げることで、祭りの運営者が主体的に祭りづくりを楽しめる環境を生み出していかなければならない。

「ほぼ私のところは立ちっぱなしなので、誰もやってくれないので、やらされました。町内会に入ったのが平成21年くらいで、そのころからやっていました。私にとってはYOSAKOIは初夏の出来事。毎年の出来事なので当たり前のようにやっていました。私の周りには踊り子として参加する人もいなかったんですね。」(60代女性：地方会場ボランティア)

「当日はね、そこに至らなくて。皆へとへとになっちゃうでしょう。だからみんなが集まるっているのも人数が200人で100人ずつ来るから、みんな仕事分業するから最後

³⁰ 2021年10月4日 齊藤純さんインタビューより

³¹ 2021年12月9日 高橋博章さんインタビューより

の方の仕事終わる人って結構遅かったりするんだよね、会場は大体3時から3時半くらいには締めるんだけど、そこから撤収していると2時間くらいかかるからその日には集まるのが難しくてね。」³²

また、会場を運営すると、住民からは苦情が寄せられる。新琴似会場の斉藤純氏は、住民に受け入れられ「当たり前文化」として定着していくことが理想だと語っている。運営上の負担を軽減するという意味でも、より幅広く地域住民から受け入れられる祭りを目指していくことが必要だ。

「知らない人から駐車場のことでものすごい怒られたり、音うるせえって苦情が来たり、いっぱい来るんだよね。もちろんやることはやらなきゃいけないし、お詫びに行ったり、話を聞きに行ったりしなきゃいけないので、苦勞と言ったらそういうところでものすごく苦勞が多い。」³³

新琴似天舞龍神の踊り子のインタビューや参与観察では、活動を通していきいきと交流し、満足している様子が感じられた。一方で、地方会場ボランティアの現状として、踊り子と同じように有益な交流をし、満足感や充実感を感じていない現状がある。担い手が祭りに参加することで有益な交流が得られるようにすることは、祭りの担い手を増やすことにもつながる。

また、祭りの地盤である地域社会にとっても祭りは有益なものでなくてはならない。これは先に述べた「祭りに参加者を取り込む」ことにもつながるが、地域住民全体が祭りの意義が感じられるようにしていく必要がある。

3-4 小括

3章を通じてYOSAKOIソーランを通じた市民交流を議論してきたが、ここで議論をまとめておきたい。新琴似においては町内会活動への参加者が減少し、活動を担う役員の高齢化が進んでいる。この一方で、テーマ型活動の場には積極的に参加する住民がおり、町内会以外の場で地域やその他の住民との接点を見出していることが分かった。

YOSAKOIソーラン祭りを通して広がったコミュニティもこれに類するものであるが、その交流は地縁を超えて展開している一方で、地域性の上に成り立つものであることが指摘できる。新琴似会場は町内会組織を基盤として成り立ち、新琴似天舞龍神も地域のチームと

³² 2021年10月4日 斉藤純さんインタビューより

³³ 2021年12月9日 高橋博章さんインタビューより

して地域住民の理解と支援の上に成り立っている。この意味で、YOSAKOI ソーラン祭りの活動は、地縁型・テーマ型両面の性質を持ち合わせているといえる。

このような性質を持った YOSAKOI ソーラン祭りは、祭りが回を重ね拡大するのに伴い、地域住民や企業など社会から広く支えられ、「公共財」としての祭りのあり方が問われるようになった。祭りの担い手は、祭りを長く続け、その効果を地域社会に波及させることを目指しているが、祭りには、祭りを支える層の厚いチームが育たないことや、祭りについて主体的に関わる担い手の不足などの課題がある。

担い手に焦点を当てて課題を探っていくと、第一に、祭りが回を重ねるにつれて担い手が持つ祭りに対する所有者意識が薄れていることがある。第二に、祭りの担い手として学生が占める割合が大きいのが、祭りを離れていく学生が多いことがある。第三に、祭りを支える町内会組織で世代交代が難航していることがある。

また、祭りが資金面で余裕がないことは、担い手が自由に祭りづくりを楽しむことを妨げており、担い手の課題と密接にかかわっている。資金面をはじめ、祭りの運営はこれまで一部の担い手によって賄われてきたが、祭りを守り、支えていく新たな担い手を社会全体に広げていかなければならない。

地域社会に目を向けてみると、祭りに対する感情や意見は様々であり、住民の総体としての意識を探ることは難しかったが、住民に寄り添って祭りのニーズをとらえ、参加者のすそ野を広げることの難しさを実感させられる。

一方、踊り子として祭りに積極的に関わる人々が集まる新琴似天舞龍神では、YOSAKOI ソーランを踊るという共通の目的のもとに、幅広い世代が参加している。新琴似天舞龍神が長年活動を続けてきた背景には、チーム内では自由に出入りが可能なテーマ型活動が行われ、熱意を持ったメンバーが集まる一方で、チームと地域との間では地縁に結びついたネットワークのもとに、活動の基盤を守ってきたという経緯がある。

祭りにとって今後求められる取り組みとして、第一に、祭りにより幅広く住民を取り込んでいくことが必要である。そして第二に、祭りをこれまで支えてきたがその弱体化が懸念される地縁組織を守るために、祭りを活用していくことが求められると考える。そして第三に、祭りの資金面や構造的な課題を克服し、祭りの担い手がやりがいを感じ、祭りに主体的に関わる環境を作り出すことが求められる。

総括すると、YOSAKOI ソーラン祭りが持つ「水平的な広がり」と「地縁性」の両方を尊重し守っていくことが、祭りの維持に欠かせないことであるといえよう。祭りの水平性、すなわち参加の自由さや交流の幅広さはこの祭りの魅力であるが、祭りを支える地縁による繋がりや、祭りづくりに長年関わってきた担い手、祭りを応援してきた地域住民こそが、これまで祭りを支え、発展させてきた基盤になっている。地域社会と祭りの維持発展のためには、祭りの水平で自由な繋がりを生かして参加者のすそ野を広げるとともに、地域住民から愛される祭りを育て、地域に分厚い基盤をつくる必要がある。

4 結論

本研究では、札幌市北区新琴似を事例に、地域の住民活動の意義を検討し、YOSAKOI ソーランを通じた住民活動の特徴と課題について議論してきた。

元来「祭り」と呼ばれるものは、社寺を中心に氏子集団によって営まれた伝統的祭礼を指していたが、このうち都市の祭礼では「見せる」要素が大きいことや、神事よりも付け祭りの要素が大きいという特徴があった。戦後以降こうした都市祭礼は、地域を離れて展開する傾向が強まり、地縁組織や社寺などの母体としない集団によって祭りが成り立ち、そこでは選択縁で人と人とが結ばれていることが指摘された。一方で、こうした都市祝祭は、社会的紐帯を再構築・強化する機能があるとされ、地域社会の持続的な発展に寄与することが期待された。

戦後、高知で始まったよさこい祭りは、高知商工会議所の有志の提言をきっかけとして、市民の健康と繁栄・商店街などの経済の活性化を目的として、市民ぐるみのつながりを基盤に始められた。1992年に長谷川岳氏によって北海道に誕生したYOSAKOI ソーラン祭りは、多様なつながりで衰退する地域の人間関係を補うことや、市街地の活性化に対する期待を背景に発展し、全国に参加者のコミュニティを拡大させた。こうしたコミュニティは、地縁に基づくこれまでの祭祀組織のネットワークとは異なり、祭りが「脱中心的」な構造を持ち、「合衆」の様相を呈していることが指摘された。

YOSAKOI ソーラン祭りが展開する現代社会においては、超高齢社会・人口減少社会の到来を前に、住民主体の地域づくりをすすめ、住民同士の交流を基盤に、力を合わせて多くの課題に対応していくことが求められている。これまで、住民交流を生み出してきたのは、町内会・自治会によるネットワークだった。その担い手の減少は、社会の重要な課題である。新琴似の町内会の活動も、排雪溝への雪かきやごみ拾いなど、生活に密接に結びついているにもかかわらず、町内会活動の参加者は減少している。

YOSAKOI ソーラン祭りを通じた交流は、「地域から離陸していく方向性」がこれまで指摘されてきたが、その一方で、踊り子は交流を展開する手段として「地域の一員であること」を表現する演舞を踊り、祭りを支える基盤には地縁によるネットワークがある。

このように、YOSAKOI ソーラン祭りは地域住民や企業など、社会から広く支えられ、「公共財」としてのあり方が問われるようになった。そこで、祭りを長く続け、祭りの効果を地域社会に波及させることが目指されている。

しかし現在、祭りを維持していくうえで、チームや会場の減少、世代交代の難しさ、担い手の主体性の低下などの課題がある。その課題について整理すると、踊り子や地方会場ボランティア、学生実行委員会などの担い手に関することと、それ以外の観客や不参加住民に関することで大別できる。前者としては、担い手の祭りに対する所有者意識や主体性の低下、学生が祭りに定着しないこと、祭りを支える地縁組織の衰退、担い手が自由に祭りづくりを楽しめる環境が整わないことなどがある。また後者としては、祭りに対して多様な意見を持つ住民のニーズを捉えることの難しさがある。祭りや踊り子に対して好感を持つ住民の声

がある一方、主体的には参加しないという住民や祭りに対して嫌悪感をいだく住民も存在する。

新琴似天舞龍神は「地域の活性化」をコンセプトに掲げ、地域の他の主体と幹部陣が密接なネットワークを維持し、活動の基盤を守ってきた。また、幅広い世代が所属するチームの中では、踊り子たちが活動を通していきいきと交流し、活動に満足している様子が見られた。層の厚いチームを増やし、祭りを活性化するために、祭り全体として地縁ネットワークの重要性を認識することが重要だ。

一方で、新琴似会場では、ボランティアが有益な交流や満足感を感じていない現状がある。担い手が祭りに参加することで、祭りの意義である有益な交流を感じられるようにしていきたい。そうした交流に魅力を感じ、主体的に参加する担い手を増やしていきたいものだ。また、新琴似会場を通して生まれる交流を、町内会組織における活動の担い手の減少・高齢化といった問題への処方箋としていきたい。

総括すると、祭りにより幅広く住民を取り込んでいくこと・地域住民および地縁のネットワークに祭りの意義を還元すること・祭りの担い手が祭りを楽しめる環境をつくり出していくことなどが YOSAKOI ソーラン祭りの課題である。また、祭りの担い手が祭りを楽しむためには、資金面をはじめ祭りが事業として安定したものになることが望まれる。そのためにも、祭りを支え、守っていく主体を地域全体に広げていくことが必要だ。祭りの意義を地域視点で問い直し、地域との相互関係の中で持続する祭りを守っていきたい。

参考文献

【参考文献】

- 有末賢, 1983, 「都市祭礼の重層的構造 佃・月島の祭祀組織の事例研究」 33 (4) : 37-62
- 伊藤亜人, 2007, 『文化人類学で読む日本の民俗社会』 有斐閣
- 岩井正浩, 2006, 『これが高知のよさこいだ！いごっそとハチキン達の熱い夏』 岩田書院
- 岩月岳史, 2009, 「地域コミュニティ再生への一視点～住民主導による地域経営の現状と課題～」 『立法と調査』 290 : 112-120
- 上野千鶴子, 1984, 「祭りと共同体」 井上俊編, 『地域文化の社会学』 世界思想社
- 内田忠賢, 2011, 「よさこい・YOSAKOI 系祝祭の普及と増殖」 『金沢大学日中無形文化遺産プロジェクト報告書』 (14) : 53-59
- 宇野正人, 1980, 「都市祭における伝統への指向」 『日本民俗学』 128 : 44-57
- 金井勝利, 1990, 「地域振興とイベント」 二瓶長記編 『イベントからのまちづくり』 ぎょうせい, pp254-267
- 加山弾・李代直美, 2009, 「地縁型組織とテーマ型組織の連携に関する研究-団地住民の NPO 創出および自治会・管理連合との連携を事例として-」 『東洋大学/福祉社会開発研究』 (2) : 55-64
- 澤田道夫, 2017, 「地縁組織の活動の歴史的背景とその現代的意義-町内会・自治会制度をめぐる基礎理論的研究-」 『アドミニストレーション』 24 (1) : 1-14
- 伊藤守・小泉秀樹・三本松政之・似田貝香門・橋本和孝・長谷部弘・日高昭夫・吉原直樹, 2017, 『コミュニティ辞典』 春風社
- 新琴似連合町内会, 1996, 『新琴似連合町内会三十年史』
- 新琴似西連合町内会, 2021 「新琴似西地区のまちづくり活動に関するアンケート」
- 菅野佐織, 2011, 「祭りによる地域ブランド価値共創のフレームワーク～交流する地域ブランドをめざして～」 『マーケティングジャーナル』 (30) : 15-29
- 総務省, 2020, 「コミュニティの現状と地域社会を運営するための人材の確保・育成のあり方」 『地域社会を運営するための人づくりのあり方に関する研究会』
- 坪井善明・長谷川岳, 2002, 『YOSAKOI ソーラン祭り 街づくり NPO の経営学』 岩波書店
- 内閣府, 2005 『平成 17 年度国土交通白書』
- 内閣府, 2007 『平成 19 年国民生活白書』
- 二瓶長記, 1990, 『イベントからのまちづくり』 ぎょうせい
- 長谷川岳・阿彦忠之, 2006, 「インタビュー YOSAKOI ソーラン祭りの不思議な力に魅せられて」 『公衆衛生』 70 (1) : 28-32
- 長谷川岳, 2006 「「YOSAKOI ソーラン祭り」を支える企画・運営法」 『音楽文化の創造 : c m c : 音楽文化と生涯学習の総合情報・研究誌』 (42) : 12-15

- 久隆浩, 2017, 「地域における交流の場の意義と効果に関する研究」『2017年度日本地理学春季学術大会』
- 広井良典, 2017, 「コミュニティとしての都市一家族・地域コミュニティの変容とこれからの都市自治体政策のあり方」『都市とガバナンス』 27 : 3-11
- 松平誠, 2000, 「都市祝祭論の転回-「合衆型」都市祝祭再考」, 日本生活学会編『祝祭の100年』ドメス出版, pp199-216
- 松平誠, 2008 『祭りのゆくえ』中央公論新社
- 矢島妙子, 2015, 『「よさこい系」祭りの都市民俗学』岩田書院

【参考ウェブサイト URL】

- 新琴似西連合町内会 「<https://shinnishi.jimdofree.com/>」 (最終閲覧日 : 2021年12月18日)
- 新琴似連合町内会ホームページ > 地域の祭り 「<http://shinkotoni-rencyu.com/sub02.html>」 (最終閲覧日 : 2021年12月18日)
- YOSAKOI ソーラン祭り公式ホームページ > 歴史と開催結果 「https://www.yosakoi-soran.jp/event_result/」 (最終閲覧日 : 2021年12月18日)
- YOSAKOI ソーラン祭り学生実行委員会 「<http://soragakusei.php.xdomain.jp/>」 (最終閲覧日 : 2021年12月18日)

謝辞

本研究を進めるにあたり、沢山の方々にお世話になりました。この場を借りてお礼申し上げます。

指導教官の宮内泰介教授には、研究の構想から本稿の推敲まで、多大なご指導を賜りました。また、笹岡正俊准教授には卒論ゼミの場で毎回、大変貴重な視点をご教示いただきました。

調査にご協力いただいた YOSAKOI ソーラン祭り組織委員会の伊藤耕作様、YOSAKOI ソーラン祭り新琴似会場実行委員会の斉藤純様、新琴似天舞龍神の梶浦宣明様、新琴似連合町内会の下村晃様、新琴似西連合町内会の高橋博章様をはじめ、新琴似住民の皆様、プラザ新琴似の皆様、よさこい祭り振興会の皆様、新琴似天舞龍神のメンバーの皆様には、大変お世話になりました。お忙しい中お時間を割いていただき、温かく私を迎えてくださり、大変貴重なお話をお聞かせ頂きました。

また、地域科学研究室の同期の皆さんには、研究室で意見や励ましの言葉を頂き、そのことは大変心強かったです。

皆様のご協力なくしては、このように本論文を完成させることはできませんでした。

皆様に心より感謝申し上げます。

令和3年12月22日 頃安悠希

